

東洋文庫近代中国研究委員会編

『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』

増補版

はじめに

東洋文庫超域アジア研究部門に置かれた現代中国研究班国際関係・文化グループは、2018年度に『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（東洋文庫近代中国研究委員会編、1980年刊。以下「本篇」）を補充するプロジェクトを立ち上げ、「本篇」未収録の戦後刊行物について新たに解題を作成し、「補遺（戦後編）」として2021年3月にPDF版をウェブに公開した（第一期）。

その後、本プロジェクトのさらなる進展と充実をめざし、2021年度から戦前・戦後を含む時期の悉皆調査を行い、リストの追補と解題執筆の作業を継続した。結果として、新たに加えられた旅行記のリストと解題を第一期の成果と併せ、増補版としてここに公開するに至った（第二期）。

第一期の「補遺（戦後篇）」が40冊（1981年以降の3冊を削除）、第二期の追補でさらに68冊が加わり、「本篇」の増補版としては計108冊（文献1件を1冊とカウント）を収録することになった。増補にあたっては、以下の方針を定めた。

- ① 戦前（明治以降1945年8月まで）の旅行記を含め、1980年刊行の「本篇」に採録されなかった（あるいは「本篇」刊行後に購入・寄贈された）東洋文庫蔵本を対象にした。その中には、稿本や写本の類も含まれる。これにより採録の範囲は若干拡大することになった。
- ② 採録時期（出版年）の下限を第一期では暫定的に1979年としていたが、第二期では便宜的に1980年に改めた。その理由は、1981年以降、訪中旅行記の数が激増し、その性格（ひいては日中関係のあり方）が大きく変わったと考えるからである。
- ③ 第一期と同じく、狭義の旅行記のみならず、訪問・視察・短期滞在・留用などの記録、また写真集なども採録した。ただし、回想録や調査記録、旅行案内書、中国訪問をもとにした評論などは除いている。
- ④ 東洋文庫に収蔵される書籍以外に、戦後部分については、国立国会図書館で閲覧可能な日本人中国旅行記も加えることとした。
- ⑤ 解題の作成にあたっては、第一期同様、記名方式を取り、末尾に解題執筆者の氏名を掲げた。

以上の方針にもとづき、2021年度より追補本のリストと解題の作成を進めた。作業にあたったのは以下の8名である。池田尚広、久保茉莉子、関智英、辻直美、中村元哉、村田雄二郎、山口早苗、吉見崇。

本プロジェクトは、次年度に向けてさらなる計画を立てている。「本篇」と今回公表する増補版と一体化して統合版とし、テキストベースでウェブ上に公開して利用者の便に供することである。すでにデジタル・テキスト化はほぼ完了し、目標としては2024年度以降に東洋文庫のメディア・レポジトリに統合版の解題全文を公開することを予定している。メタデータの作成やデザイン上の工夫など、技術的な問題を含めて検討すべき課題は少なくないが、なるべく早い時期の公開をめざして、「明治以降日本人の中国旅行記」データベースを完成させる所存である。

2023年9月25日

東洋文庫超域アジア研究部門
現代中国研究班 国際関係・文化グループ
村田雄二郎

~~~~~

#### 参考 第一期 補遺（戦後篇）解説

1980年3月、東洋文庫近代中国研究委員会は1960年代から蒐集した日本人の中国旅行記を整理し、各冊に解題をつけて『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（以下、本篇）を刊行した。中心となったのは市古宙三で、1874年から1979年までに刊行された旅行記400冊余が年代順に収録されている。

1874年といえば、近代的条約である日清修好条規が締結されて3年目、また、1979年といえば、日中両国が平和友好条約を結んだ翌年にあたる。戦前戦後をまたぐ120余年の日中関係の歴史を、日本人の中国旅行記を介して通観しようという試みは、中国ブームが日本で巻き起こった1970年代末の状況に照らしてみると、まことにタイムリーで意義深い試みであったように思われる。

それから40年を経て、日中関係は大きく様変わりし、かつての「友好」と「反省」という枠組みにはとうてい収まらないほどの錯綜した状況を呈している。そうした中で、日本では資料の公開などにも後押しされて、戦後の日中関係が歴史研究の対象になりつつある。現代中国研究班（国際関係・文化グループ）ではそのような状況に鑑みて、戦後日中関係を研究するための基礎的作業の一環として、本篇には未収録（旧近代中国研究室別置書以外のもの、またはその後購入したしたもの）である戦後の中国旅行記をリストアップし、解題をつけるプロジェクトを立ち上げた。2018年度のことである。作業にあたったのは、総括の村田雄二郎のほか、以下の6名である。池田尚広、久保茉莉子、関智英、中村元哉、山口早苗、吉見崇。

補遺は本篇と同じく〔正確には「本篇と異なり」、第二期にて訂正〕刊行年順で並べた。滞在記や写真集など、厳密に言えば、旅行記ではないものも含まれるが、日本人による中国滞在の記録とみなせるものは広く収録した。その結果、補遺に挙げたのは、1953年から1979年前後まで

刊行された 41 冊〔正確には 40 冊，第二期にて訂正〕の旅行記である。（補遺には一部本篇と重複したものおよび 1980 年以降のものが含まれる。）

本来であれば，補遺を本篇と一体化し，かつ現在まで網羅的に収録すべきであろう。だが，1980 年代以降は爆発的に中国旅行記の類の出版物が増えること，また，旅行の質や形態も大きく変貌することなどを考慮して，補遺はとりあえず 1979 年を一つの区切りとすることにした。また，本篇との一体化は技術的に困難なので，便宜的に本篇の PDF ファイルをアップすることにした。

現代中国研究班（国際関係・文化グループ）では，今後，より網羅的な旅行記の収集と分析につとめ，補遺を適宜バージョンアップしてゆく所存である。また，内容分析やデータの補充を行うことで，戦後日中関係の研究に新たな視野を拓いていきたいと切望している。広く江湖の理解と協力を仰ぐ次第である。

2021 年 3 月 15 日

東洋文庫超域アジア研究部門  
現代中国研究班 総括  
村田雄二郎

## 【凡例】

- ◆ 書誌情報は「本篇」にならい、書名、編著者、出版地、出版者、出版年、頁数、請求記号、解題の順に並べた。また、末尾に解題執筆者名を記した。
- ◆ 請求記号のないものは、東洋文庫に未収であるが、国立国会図書館デジタルライブラリーで閲覧可能な文献も含まれる。
- ◆ 並びは出版年順としたが、出版年が不明、または非刊行物（稿本など）の場合は、訪中年を出版年と置き換えた。また、同一年度の場合、編著者の五十音順に配列した。
- ◆ 収録文献の下限は1980年（刊行年）とした。
- ◆ 文中に現れる人名については、すべて敬称を省略した。
- ◆ 文中の漢字は、原則として日本の常用漢字を用いた。
- ◆ 年の表記は西暦を用い、必要に応じて年号を併用した。

1873

乗植日記／衣笠豪谷著

写本 1873-74 1函6冊〔XI-6-B-d-24〕

筆者は備中（岡山）窪屋郡白楽市村（いまの倉敷市白楽町）出身の日本画家。名は濟，字は紳卿。1873年に中国画を学ぶために清国に渡り，翌年まで滞在した。漢文で綴られた日記であり，稿本ではなく，複数名の手で浄書された写本の彩色複写版である。管見の限り，稿本は第4冊のみ岡山県立美術館に蔵する。

明治初期に中国を訪れた日本人は少なくない。ただ，記録や著書で江湖に広く知られた事例はわずかである。その中で，上海を拠点に，蘇州・杭州・鎮江・南京・揚州・寧波・天津・北京・漢口・岳陽など一年半にわたり中国を跋涉した本書は，刊本ではないものの，近代日本の中国旅行記としてほぼ最初期のものと言えよう。各地では文人墨客との交流や書画骨董の蒐集の様子がつぶさに綴られる。著者は，現地では専門の画業のほか，農業方面の研究調査に力を注ぎ，帰国後は勸農局に勤め，養鶏法や孵卵法の普及に努めた。

衣笠が遺した絵画は主に岡山県立美術館に収蔵される。なお，本書の紹介文として張明傑「明治初期日本書画家の中国体験：衣笠豪谷の未刊日記を中心に」（『知性と創造：日中学者の思考』第6号，2015年2月，日中人文社会科学学会）がある。

（村田雄二郎）

1901

くまで／東洋生（神田正雄）著

稿本 1901 線装7冊〔貴17256〕

自序によれば，様々な文献や見聞を熊手のように掃き集め「人間の肥料」とせんとしたという。内容から見て，1901年に四川省に入った著者が，揚子江上流域に関する案内書として書き溜めたものと思しい。序には「（1901年）8月10日」の日付があり，また目次前には「Through the Yangtze Gorges」（三峡を過ぎて）とある。目次は以下の通り。第一章 緒言／第二章 上海宜昌間／第三章 宜昌及び附近／第四章 宜昌以上／第五章 四川省／第六章 重慶行／第七章 重慶／第八章 重慶二／第九章 重慶三／第十章 下航／第十一章 漢口／第十二章 揚子江流域に於ける自然地理／第十三章 新しき宏大の急流／第十四章 汽船による最初の上航／補遺。

なお，第1冊には「四川省概観」を棒線で消して「西清事情」とする目次があり，1905年刊『西清事情』のそれと一致することから，本書はその稿本であると考えられる。

（村田雄二郎）

1905

西清事情／神田正雄著

東京 農事雑報社 1905 191頁〔7935〕

「西清」とは当時も今もあまり使われない地域名だが，四川省，古の巴蜀の国を指す。あるいは福沢諭吉『西洋事情』をもじり，タイトルに掲げたものか。もとは「四川省概観」として

いたのを出版に際して改題したことが、稿本『くまで』からわかる。作者の神田正雄(1879-1961)は、早稲田大学卒業後、1901年に四川省重慶府の達用学堂の教習として赴任し、現地に3年滞在した。その際の見聞を「内外人の著書旅行記等」と照らし合わせて、総合的な地域事情案内書としたのが本書である。ただし、参考にした書籍名は一切掲げられていない。

「例言」によれば、著者は本書のために6か月省内各地を旅行したという。重慶の対外開港は1891年であり、日本領事館の設置は96年である。日本人による四川旅行記としては、竹添光鴻(進一郎)『栈雲峡雨日記』(1879年)に次ぐ早期のものと思われる。全11章から成り、四川の自然地理から風俗人情、歴史制度、教育宗教の万般を網羅する。目次は以下の通り。第一章 諸論／第二章 天然／第三章 地理／第四章 住民／第五章 人情／第六章 風俗／第七章 歴史／第八章 制度／第九章 教育／第十章 宗教／第十一章 結論。巻頭に大隈重信、長岡護美、十文字信介の序、巻末に四川省全図を付す。同じ著者に『四川省綜覧』(東京、海外社、1936年)の作もある。

なお、『くまで』と題する線装本7冊(貴17256)の一部は、本書の原型をなす。

(村田雄二郎)

## 1924

### 名士之滿蒙觀／吉永成一編

奉天毎日新聞安東支局 1924 235頁 [17065]

著者は当時、『奉天毎日新聞』安東支局長。序文によれば「滿蒙に足踏したるものゝ断片なり意見を、此二三年来蒐め置きて編纂したるものが即ち本書である」という。『奉天毎日新聞』所載の記事を主に、他紙の論評も加えて一書としたアンソロジーである。以下、順に筆者と題名を列挙する。各篇末尾には掲載紙が記されるが、ここでは省略する。

大谷光瑞「滿蒙経営策論」、渡辺得司郎「滿蒙拓殖政策」、柘内壬五郎「滿蒙開發上の三大事業＝大豆の改良＝水田の開發＝緬羊の改良＝」、川村竹治(談)「調査機関を統一せよ」、川上常郎(談)「滿洲工業の振興策」、堀諫「白音太拉を視察して」、千葉豊治「資源を得べき唯一の地」、奉天毎日新聞社調査「甘草産地としての滿蒙」、石塚英蔵(談)「土地問題の解決が必要」、田島錦治(談)「農業本位に進め」、岡実(談)「工業の滿洲移住は不利」、中名生国穂「滿洲に於ける棉花の将来」、奉天毎日調査「外国人活躍の真相」、牛沢玉城「滿蒙の門戸開放」、滿鉄調査課員調査「欧米宣教師の潜勢力」、渡辺得司郎「水田問題に就ての考察」、滿鉄農業課調査「鮮人と水田問題」、下村宏(談)「鮮人と滿洲経営」、柘内壬五郎「滿蒙と緬羊飼育」、横堀善四郎(談)「滿洲の牧畜業」、田村順之助(談)「特殊会社の失策」、河内山楽三(談)「南北滿洲を視察して」、荒川五郎(談)「往来を簡便ならしめよ」、俵孫一(談)「資金と事業家に次ぐ」、関東庁調査「滿洲の通貨及金融」、古賀廉造(談)「官憲の保護が足りない」、大町桂月「滿鮮の山水」、永井柳太郎(談)「余りに滿鉄を頼り過ぎる」、大蔵公望「改良を要する日本品」、来栖健助「貿易と金銀売買」、内藤確介(談)「不安定なる林業」、津野田是重(談)「対張作霖は斯うだ」、加藤日吉(談)「在滿邦商の弱点」、湯原元一(談)「在滿児童は頭脳がいゝ」、樋口詮三(談)「資本主義ではなくては駄目」、本間英史(談)「結核療養の好適地」、森沢省巳「我農業根本策と西伯利の農業」、花井卓蔵／平石氏人／原善道／早川千吉郎(談)「領事裁判改善問題」、有川鷹一(談)「何時でも滿洲へ」、近藤良吉「滿蒙視察管見と日本の經濟的地位論」、佐藤一三「東部蒙古の三大市場 将来の盛衰如何」、

小西晴溶「満蒙の開発は日本の使命」、岸川益一「追ひ詰められたスラブ族」。なお、文庫所蔵本は目次の1枚目を欠く。

(村田雄二郎)

## 1926

### 満蒙を廻りて／神田正雄著

出版地・出版者不明 1926 59頁 [XII-3-A-43]

扉に「以印刷代謄写」とあるので、私家版のパンフレットとして印刷したようである。序によれば、著者が満洲を訪れるのは、明治42(1909)年から数えて7回目だという。大連・旅順から、奉天・撫順・長春など南満洲、ハルビン・チチハルなど北満洲、洮南など東部内蒙古を巡遊した、ジャーナリスト出身にして衆議院議員となった著者の旅行記である。著者の関心は日本が直面する人口問題と食糧問題にあり、満蒙(東三省と熱河特別区)への移民を積極的に奨励し、南満洲では中枢機関として満鉄(南満洲鉄道株式会社)が満蒙の発展を援助して事業の拡張を図り、また東部内蒙古への農業移民を考えるべきだという。

(村田雄二郎)

### 我国と隣邦の民国：大正15年度支那視察報告／神田正雄著

出版地・出版者不明 1926 51頁 [XIII-5-C-a-11]

『満蒙を廻りて』の姉妹編。「第一 民国本部の諸問題」と「第二 満蒙に於ける諸問題」に分かれる。後者は『満蒙を廻りて』の簡約版である。満蒙視察を終えた著者が北京・保定・天津を訪問し、中国の要人や在留邦人と会談した際の見聞や感想が記される。北京では段祺瑞や沈瑞麟と、保定では呉佩孚と、天津では張紹曾と面談したというが、その具体的内容は示されない。著者が関心を向けるのは、「軍閥」混戦の中、中華民国の政局の行方であり、とくに当時盛んであった鉄道共同管理説や北京で開催された関税会議に対する自らの見解が披瀝される。

(村田雄二郎)

### 武昌滄桑記 武漢三鎮游記(東亜研究講座第11輯)／笹川潔[述]・後藤朝太郎[述]

東京 東亜研究会 1926 57頁 [5475]

武昌滄桑記の笹川潔は読売新聞主筆を退いた後、漢口の湖広新報社長、湖北省名誉顧問などを務めた人物で、兄は美術評論などで著名な史学者の笹川臨風。タイトルの「滄桑」は海が桑畑に変化することで、移り変わりが激しいことを意味する。内容は武昌の歴史を紹介したもので、1926年9月の武昌城に籠城した呉佩孚麾下の北軍と北伐軍との戦闘が契機になっている。中国での戦争が夏に多いことを、1921年に蔣作賓率いる北伐軍が岳州から湖北を攻撃した際のエピソードを交えて説明するなど興味深い。武漢三鎮游記は、この頃毎年のように武漢を訪れていた後藤朝太郎による武漢紹介。講演は、呉佩孚派の劉玉春と陳嘉謨が武昌に籠城し北伐軍と対峙し注目されていたことに合わせたもので、奥略楼—省議会—武昌大学—賓陽門—抱冰堂(張之洞祠堂)を説明した後、武昌城外船着き場にならぶ紡績工場、武昌乙棧・丙棧といった旅館、萍郷煤碓局、造紙廠などに触れ、漢口郊外の外人洋商跑馬場(競馬場)、唐代から知ら

れた漢陽郊外の鸚鵡洲，三鎮郊外の狩猟スポットだった蘆荻を紹介する。さらに江西の廬山と湖南の洞庭湖も武漢の延長で考えるべきとする。

(関智英)

## 1927

支那行脚記／後藤朝太郎著

東京 万里閣 1927 474 頁 [3677]

行脚記とあるが、北伐を前後する時期の中国各地（北京・上海・漢口・四川・杭州・広州ほか）の事情・風俗を紹介した随筆である。著者の行動として時期が確定できるのは、1927年4月に香港から広州まで日清汽船廬山丸に乗船した部分で、一等・二等と三等以下の船室が鉄格子で区切られていることに触れ、「生命財産を保護する方法としてはやむを得ぬこと」とする。北伐軍占領後に真新しい青天白日満地紅旗のたなびく上海，掠奪を受けた漢口日本租界を伝えた記事などは、本人が直接体験したことに、現地で集めた伝聞や新聞情報などを加えて構成されている。各地で集めたと思しき宣伝ビラをはじめとする写真も複数掲載され、北伐前後の時期の中国社会の雰囲気を知る一助となろう。

(関智英)

## 1933

満華一巡之旅／神田正雄著

稿本 1933 ノート5冊 [貴 17255]

当時の著者は、元東京朝日新聞社支那部長，元衆議院議員にして，雑誌『海外』社社長。満洲建国後の1933年10月から12月まで現地と中華民国を訪問した際の日記で，ノートブックに縦書きペン字で綴られる。『甲戌之旅』へと連続する，満洲・中国各地を巡り当路に取材した著者の旅日記の一部である。各冊冒頭に自序をおき，第二冊以降日記の後には「道聴途聞（録）」と題する，要人の談話内容を直話形式で記す。談話者の多くが率直な語り口で当時の緊迫する日中関係や中国の政情を語っており，記録者のバイアスは避けがたいものの，当事者の証言として貴重な記録となっており，史料的価値は高い。各冊の旅程と，「道聴途聞（録）」に紹介される主な談話者は以下の通り。

第一・二冊：大連—奉天—新京（長春）—ハルビン—チチハル—新京—奉天—錦州—朝陽—熱河—北京。十河信二・金井清・大蔵公望・畑俊六・儀我誠也・小磯国昭・宇佐美寛爾・土肥原賢二・上杉益喜ら。満洲国では，チチハルから軍用機に乗り，満ソ国境を上空から観察するなど，関東軍の全面的支援を受けた。第三冊：北京。湯爾和・殷汝耕・黄郛・何澄・商震・周作民・王克敏・何応欽・江朝宗ら。ほかに，承徳の離宮（避暑山荘）や寺院を巡った際の見聞録「見矣聞矣」がある。第四冊：北京—天津—済南—青島—上海—南京。于学忠・孫潤宇・魯嗣香・呉鼎昌・姚震・張士譚・韓復榘・崔士傑・段祺瑞・唐有壬・汪精衛・賀耀組・陳儀ら。第五冊：上海—福州—台北。李景鏞・呉光新・蔣方震・張耀曾・謝春木・張公権・孫洪伊・陳友仁・欧陽予倩・羅万俔ら。筆者は台北北郊の草山（現・陽明山）温泉で年越しを迎える。『甲戌之旅』に続く。

(村田雄二郎)



**甲戌之旅／神田正雄著****稿本 1934 ノート2冊 [貴 17254]**

甲戌は1934年の干支。第一冊の自序には「昭和九年一月元旦 於草山温泉 東洋学人」とある。ノートブックに縦書きペン字で綴られた旅日記である。前年から台湾を訪れていた著者が、廈門—汕頭—香港—広州—桐州—南寧を巡った際の見聞や要人との会見の様子が記される。「道聴途聞録」には、香港での胡漢民、広州での林森・鄒魯、南寧での李宗仁との談話が記されるほか、以下の人物の直話が紹介される。李得一・松井石根・蕭仏成・林国庚・劉紀文・陳濟棠ら。台北滞在時に面会した人物の中には、林呈禄や羅万俔の名も見える。

第二冊の自序は「昭和九年一月二九日 於香港旅舎 東洋学人」と記す。香港から日本への帰途の日誌であり、後半はやはり「道聴途聞録」として胡漢民の直話などを収める。

(村田雄二郎)

**本年観夕北支那（私家版）／神田正雄著****稿本 1934 73頁 [6311]**

内容は1934年春以降に北平・天津・山海関などを3週間かけて訪問して得た知見をまとめたもので、同年春に神田が記した「我カ対支国策決定参考私見」を補足する。南方滞在中の黄郛（北平政務整理委員会委員長）には会えなかったものの、神田は袁良（北平市長）・許修直（黄郛秘書長）・何応欽（軍事委員会北平分会委員長）・殷同（北寧鉄路局局長）ら要人と会見した。蒋介石は「黄郛を名目上の北支の全権と為し、実力は何〔応欽〕氏に握らしめた訳である」と観察し、黄郛の基盤が不安定であること、文武官問わず華北には張学良系の人ばかりが居のこっていること、黄郛に代わって張学良を呼び戻して北支那に覇を立てさせる説が勃興するほど、北支那の後継者問題が難しい点などに言及した上で、後継者として何応欽が最も適任だが、黄郛以上の仕事は難しいとする。この他、外交上不都合な記事を中国の新聞記者が平気で書くことに苦言を呈する何応欽、山西に優良な大炭坑や鉄砵山があるにもかかわらず、運搬費の高さから活用できていないこと、日本の支配を望む現地の声なども採録している。

(関智英)

**新帝国への旅／神田正雄著****稿本 1934 ノート1冊 [貴 17253]**

新帝国とは満洲国のことで、自序には「昭和九・六・二四 於目白文化村 東洋迂人」とある。ノートブックに縦書きペン字で綴られた満洲の旅日記である。大連に上陸後、奉天—新京—山海関とめぐり、その後は『北支那への旅』に接続する。すでに馴染みの多い満洲各地の訪問先で、筆者は朝日新聞や満鉄の人的ネットワークを通じて精力的に行動するほか、奉天では土肥原賢二らと面談、長春では皇帝溥儀に謁見した（通訳は林出賢次郎）。同地では、満洲国要人および多くの日本政府・軍関係者と面会したことがつぶさに記されている。

ノートの後半部分は「途上之見聞」と題する個別の面談記録で、数十頁に及ぶ詳細な取材メモである。取材対象の人物はアルファベットと実名を交えているが、以下の人々が含まれる。千葉豊治・橋樸・土肥原賢二・臧式毅（民政部大臣兼奉天省長）・閻伝紱（奉天市長）・菱刈隆

(関東軍司令官)・沈瑞麟(宮内府大臣)・谷正之(満洲国大使館参事官)・鄭孝胥(國務総理)・宇佐美寛爾(関東軍司令部顧問)・リンチウ(林出賢次郎, 満洲国宮内府行走)・西尾寿造(関東軍参謀長)・田代皖一郎(関東軍憲兵隊司令官)・小林省三郎(駐満洲国海軍司令官)・儀我誠也(山海関特務機関長)ら。その談話内容は、帝制実施後間もない満洲国首脳らの思想や認識を知る上で一定の史料的価値を有する。ほかに「満洲国皇帝陛下に謁見」のメモもあり、溥儀の打ち解けた談話の内容(近衛文麿への関心、呉清源の碁の話など)も直話として引かれる。

(村田雄二郎)

### 北支那への旅／神田正雄著

稿本 1934 ノート2冊 [貴 17252]

『新帝国への旅』の続編。同じくノートブックに縦書きペン字で綴られる。

第一冊冒頭の自序には「昭和九年七月十六日天下第一関を訪ね帰りて 於山海関東洋旅舎東洋迂人」とある。『新帝国への旅』の続編にあたり、ノートブックに縦書きペン字で綴られた日記である。旅程は、山海関に始まり、北京—太原—大同一張家口と移動し、北京で終わる。張家口では宋哲元・秦徳純に面会している。後半には「見たり聞いたり」と題し、以下の人物の談話が紹介される。柴山兼四郎(北京駐在武官)・王朝佑(山海関公報社)・袁良・何澄・雷寿榮・林亀喜・何応欽・湯爾和・何其鞏・殷汝耕・段正元・許修直・唐蟒・祝惺元ら。さらに「山西省を訪ふの旅」と題する紀行文があり、現地要人との会見記、省内各地の見聞、雲崗石窟の訪問のことが語られる。第二冊は張家口・北京・天津訪問の日記であり、張家口から張北県まで軍用車で往復した際の体験談が「内蒙古旅行記」にまとめられる。また「見たり聞いたり」として、張熾章・胡霖・陸宗輿・姚震・孫潤宇・王揖唐らの談話を収める。

(村田雄二郎)

### 満洲文化と北支の見聞(霞山会館講演第19輯)／水野梅暁[述]

東京 霞山会館 1934 39頁 [4697]

1934年9月11日に霞山会館で行われた水野梅暁の講演会録。東亜同文書院の一期生で、僧侶の立場で日中交流を推進した水野は、日満文化協会の設立や事業計画の策定にも参画した。本講演は、水野が日満文化協会の事業内容と、事業に対する中華民国側の反応を語ったものである。前半では、内閣文庫公文書の整理や熱河古建築の修善、『清実録』の印刷など、協会による古文化の保存や復興の試みは北平の学者に歓迎され、彼らが知見や資料の提供に積極的に応じているとして、事業の好評ぶりを紹介する。後半では道徳学舎創始者として知られる段正元の紹介に力がこめられる。段は何応欽や何健らが弟子の礼をとるほどの人物で、北支停戦協定が実現したのも段の影響が大きいとする。そして、段の説く「大同」の実践によってこそ北支を安定させることができ、それは世界大同の前提でもあるのだと熱弁をふるっている。巻末には、講演会参加者に資料として配布された段と水野の会談要旨「段正元氏訪問録」を付す。

(辻直美)

## 1937

土匪村行脚／後藤朝太郎著

東京 北斗書房 1937 440 頁 [3128]

講演速記（講演時期は不明）が元になっているため、様々な話が混入しているが、大きな柱は四川と江蘇太湖周辺の2つの旅行体験談である。いずれも旅行時期は不明だが、前者については1924年8月に後藤が初めて四川省に入った際に石川熊蔵（日清汽船徳陽丸代理船長）の話聞いたとある。1923年9月に四川涪州荔枝で発生した宜陽丸事件についての伝聞は具体的に興味深い。後者は一銭蒸気など民船を乗り継いで上海から丹陽までをたどるもので、時期は内容から1930年代と推測される。途中、海賊の名所として知られた太湖周辺をめぐり、発動機船で賊が民船を襲うことや、賊との一問一答など興味深い。経路は次の通り、上海（黄浦）—龍華—宝帯橋—蘇州（胥門）—太湖洞庭東山—楊湾—洞庭西山—木瀆—光福—善人橋—蘇州—常熟—無錫—宜興—東太湖—溧陽—金壇—珥陵—丹陽。

（関智英）

## 1938

長江千里／後藤朝太郎著

東京 高陽書院 1938 313 頁 [12953]

タイトルに長江とあるが、内容は長江に限らず「全支の風物の有りのまゝを随筆風に説いたもの」で名所案内に近い。時期のわかる旅行記は4つある。掲載順に、最初は鱸魚（スズキ）で名高い江蘇松江の訪問記（日帰り）である。同行者である関君の洋装姿から、往路の車中では車掌に、松江では公安にそれぞれ目をつけられ、結局松江では、公安と兵士数名が護衛についてまわり、落ち着いて鱸魚を探索する雰囲気になくなってしまふ顛末が興味深い。時期は1936年夏で、上海近郊はいずれもやかましく「神経を尖らしてゐる」といった記述からも、日中戦争前夜の緊張感が伝わってくる。次は1936年7月の安徽黄山訪問である。駐日大使許世英からの紹介状はあったものの、外国人の旅行禁止区域であるため、南京の外交部や杭州市政府の許可といった、事前の手続きに数週間を費やしていることがわかる。続いて1927年4月の広東・香港での体験が載り、広州では共産党粛清直後に街頭に掲示されたスローガンの文言などが記される。最後は1927年4月から5月にかけて上海から漢口への旅で、北伐戦争の最中、長江を間に南北両軍が向かい合っている中、各地で銃声・砲声を耳にしながら日清汽船の襄陽丸で長江を遡上したものである。護衛艦蓼の艦長（堀勇五郎少佐）や蒋介石の密使高某との交流も記され、貴重である。

（関智英）

## 1939

中支風土記／高井貞二著（絵と文）

東京 大東出版社 1939 327 頁 [3679]

従軍画家として中支に赴いた洋画家・高井貞二（1911-1986）による旅行記で、大東出版社による風土記シリーズの一冊。著者の従軍は、本書の内容から、日本軍が上海から南京に侵攻し

た後の1938年だったと見られる。長崎から航路上海に上陸し、その後、蘇州—南京—九江—廬山—漢口—漢陽—武昌—杭州を巡っている。従軍とはいえ、九江へと向かう航路で敵襲をこうむったほかは、いたって平穏な旅であり、著者はもっぱら各地の風光を愛で、名所旧跡をめぐりながら中国の歴史や文学に思いを馳せる。上海では爆撃された商務印書館跡、南京では光華門の戦跡などを見学するものの、従軍という立場上、皇軍の躍進ぶりをたたえ、戦闘による残骸やそこに生える雑草なども、情緒的にながめるばかりである。旅行記のほか、仏像、庭園、茶館、絵画、商売、中国人の性格、大陸旅行マニュアルなどについても記されている。きまって妖麗な半裸の美人画を飾っている甘栗屋、壊れた瀬戸物をつぎ合わせる行商の修理屋など、画家ならではのマーケット観察は興味深い。著者自身による旅先のスケッチも収録されている。

(辻直美)

#### 北支風土記／向井潤吉著（絵と文）

東京 大東出版社 1939 290頁 [4399]

陸軍の報道班員として1937年秋に北支戦線を旅した洋画家・向井潤吉（1901-1995）による従軍記。著者に与えられたミッションは、「北支戦線に於ける皇軍の活躍状況をスケッチし、これを広く国民に紹介する」ことであった。大連から天津—北京—内蒙古—大同一綏遠—保定—石家荘を巡った著者は、「僕の憧憬の土地の一つ」とする北京で、名所旧跡の見物を楽しむ余裕のあったものの、張家口から山西へ移動して前線のただ中に踏みこんでいく。著者は、兵隊と列車やトラックに同乗しながら前線を巡り、自らを戦争の過酷な環境に追い込むことで、現地のリアルな状況を把握しようとする。戦闘で廃屋と化した駅舎、野戦病院に向かう血まみれの負傷兵の一群、道の両側に積み重なる軍馬の死体など、著者による描写は、戦闘の激しさや悲惨さをあますことなく伝えている。本著には、都市部の平穏や賑わいと、前線の凄惨さが併行して描かれる。また、戦争による人々の生死に理知的に迫ろうとする著者は、他方で、帰国後に「事変の飛沫は決して安閑とした境地に夢を追う痴呆を許さない」として「彩管報国」をめざす「大日本従軍画家協会」の発起人の一人となる。こうした、戦争と日常、あるいは戦争と芸術とが境目なく混在しうるような状況が、ある意味で戦時のリアルなのかもしれない。

(辻直美)

## 1940

#### 南支風土記／吉田謙吉著（絵と文）

東京 大東出版社 1940 282頁 [15593]

向井潤吉『北支風土記』、高井貞二『中支風土記』、中村正利『太平洋風土記』とならぶ、大東出版社の風土記シリーズの一冊。著者の吉田謙吉（1897-1982）は、築地小劇場創設時のメンバーとして舞台装置や宣伝を手がけた舞台美術家。1938（昭和13）年に従軍画家として「南支」に赴いた。従軍は海軍報道部の派遣によるもので、自ら志願したとされる。同行者には、東京朝日新聞の古田常太郎・武田正次・丸山四郎、東京日日新聞の隅田恭・和泉恭・佐藤振寿がいた。一行は、廈門から海南島へわたり、三亜・崖県・海口をめぐった後、広東へわたった。各地では日本軍の駐留先のほか、戦跡や市街、史蹟などに案内され、食事も乗船にあたって鯛の尾頭つきに赤飯が供せられるなど、その待遇は賓客あつかいであった。

「考古学」に対して、「現代」のモノを科学的な方法で分析する「考現学」にこだわる著者は、行く先々でノートとライカのカメラを駆使して対象を「採集」した。日本軍がジャングルに丸太でしつらえた洗面所や洗濯場、街で遭遇した大葬列、広東の水上生活者、訪問した小学校の児童の姿など、著者の関心は日本軍や現地の人びとの暮らしぶりや風俗にある。本書には文章による丹念な説明のほか、80点余りの風景画やイラストが掲載されるが、精緻に記録された人びとやモノの姿は、ドールハウスの人形やミニチュアのようなものである。「南支」の光景の中にいる日本人というエキゾチズムも、著者の一貫した関心である。ヤシ林に幕営する日本軍を「映画の外国人部隊のようだ」と感じ、海南島にある朝日新聞や毎日新聞の支局を訪ねて、朝日新聞の屋上から映画「ペペルモコ（望郷）」そっくりの白亜の市街が見わたせる、毎日新聞には洋風バスやアップライトピアノがあると驚きをみせている。旅先では、作家の火野葦平（本名は玉井勝則）や後に美術評論家となる竹田道太郎（当時は美術記者）など、様々な人物とも邂逅している。

言葉やスケッチで現地の状況を丹念に記録した本著であるが、「客観性」にこだわるゆえか、皇軍の躍進ぶりが強調されないかわりに、戦争の苦悩や悲惨さも感じさせない。描かれた人物の顔には、目鼻がほとんど描かれていない。帰国してまもない著者は、旅をともにした記者の武田正次が海南島で戦死したとの報を受けとった。

（辻直美）

## 1941

**中南支並香港視察報告書：自昭和十五年十一月至昭和十六年三月／神田正雄著**

**出版地・出版者不明 1941 130頁（タイプ謄写印刷） [8026]**

著者の当時の身分は、雑誌『海外』社社長。報告の提出先は不明であるが、同じ秘密扱いの『北支、蒙疆及満洲国視察報告書』（1939年3月）が陸軍省に提出されており、印刷の体裁がほぼ重なるので、同じく陸軍宛の報告書と見てよいだろう。第一篇「中支視察報告書」、第二篇「南支視察報告書」、第三篇「香港査察報告書」の三部からなる。中支の視察先は南京と上海で、中国要人との会話も直話の形式で記録される。実名で談話が収録されているのは、汪精衛国民政府主席、林伯生宣伝部長、虞洽卿、蘇錫文、丁黙邨らである。著者は「遺憾なことは支那の人々の心は事変勃発の当初に較べて益々日本を離れて反対に重慶政権を謳歌するの傾向が強められて行くことである」（8頁）と、中支視察の印象を率直に語る。第二篇は台湾から廈門・汕頭・広州と訪問した際の、また第三編は香港を視察した際の日中当路との会談の様子や見聞が語られるが、著者が特に関心を寄せるのは、重慶政府に対抗して海外の中国人の心をいかに南京政権側に引き寄せるかという「華僑工作」をめぐる諸問題である。

（村田雄二郎）

**ハルビン点描／北野邦雄著（写真とも）**

**東京 光画荘 1941 写真24頁・本文86頁 [16882]**

ドイツ語講師から写真界に転じ、写真専門書の刊行や執筆に活躍した著者によるハルビン旅行記兼写真集。著者が現地を訪れたのは1939年初夏のこと。訪問の経緯は不明だが、同年の『カメラ』誌上で作品を発表している（北野邦雄撮影「はるびん」『カメラ』第20巻第9号、1939年9月）ことから、同誌の依頼による仕事だった可能性がある。著者にとっては、エキゾ

ティックで豊富な材料に恵まれ、「とても5日や10日では撮りつくせない。…ハルビンほど写真的に楽しいところを他に知らない（日本、満洲、支那に限定して）」といわしめるほどの旅であった。

著者は、ロシア人の街としてのハルビンと、そこに生きるロシア人の存在に心をひかれている。ヨーロッパにもあまり見られないような広々とした路や街路樹、建築が美しいハルビンだが、ロシア人は亡国の人である。乞食も多い。エミール・ヤニングス演ずる「最後の人」のような風貌のロシア人ドアマンは「いらっしゃいまし」と日本語を話し、エレベータ・ガールのロシア人女性は用語・態度ともに日本的であった。本著に掲載される24点の写真は、盲目のアコーディオン弾き、尼僧・乞食・教会・十字架など、ほとんどがロシア人やその文化を被写体とする。写真専門家として、日本にはない街頭写真師の「早取」システムを観察したり、カメラ店の少し古くて珍しい品揃えを楽しんだりもしている。ハルビンの写真団体「哈光倶楽部」の人びとからも歓迎され、その交友は日本に帰った後も続いたようだ。ハルビンでは異国風モチーフの多さから写真熱が高く、1938年頃からは日本のカメラマンや雑誌編集者が多数現地を訪れたことで、現地の写真グループの活動が日本にも知られるようになっていた。とりわけ「哈光倶楽部」は、その代表的な存在であった（満洲芸文年鑑編纂委員会編『満洲芸文年鑑』康德9年度版、満洲富山房、1943年、31-32頁）。戦後の著者は、写真雑誌の刊行や個人著作の執筆にはげむかたわら、1967年に設立されたカメラ博物館「ペンタックス・ギャラリー」の初代館長となり、クラシックカメラの普及に尽力した。

(辻直美)

## 1953

### 見てきた中国（世界風土記1）／帆足計著

東京 岩崎書店 1953 250 頁

著者は1952年4月、東南アジアからヨーロッパを経てソ連に入り、その後、モスクワ国際経済会議の中国代表南漢宸（中国国際貿易促進委員会主席）の招きで訪中し、約2か月間滞在した。同行の高良とみ・宮腰喜助とともに第一次日中貿易協定（1952年6月1日付）に調印し、またアジア・太平洋地域平和会議準備会にも出席した。「中国の旅」と題された前編は、北京・武漢・沙市・上海といった各地の見聞が中心であるが、北京郊外の農村訪問や長江の水利工事、また「解放後」中国における労働、教育の現状に関する事柄が多い。在華日本居留民との接触もあり、鉄道関係者との座談会のほか、満洲映画協会にいた持永只仁、森川和代とも対話している。後編の「日中貿易の現状と将来」は、中国国貿促主席南漢宸、秘書長冀朝鼎の印象にはじまり、モスクワでの事前交渉、北京での会談、日中貿易の現状について記述されている。付録として「貿易の手引き」「貿易用語解説」ほか、日本の対中及び中国の対外輸出入に関する品目、貿易額の一覧がある。分冊として同著者の『見てきたソ連邦』も刊行されている。

（池田尚広）

### 中国に使して：村山氏帰国歓迎午餐会記録／村山佐太郎〔述〕

東京 大日本水産会 1953 31 頁 [Q2039]

著者は1953年9月28日から11月3日まで大日本水産会顧問として中国通商視察議員団に加わり、両国間の漁業問題について協議するため北京に滞在した。本書は帰国後の歓迎午餐会での関係者の挨拶や訪中報告を記録したものである。内容は、平岡常次郎（大日本水産会会長）、周東英雄（日本遠洋底曳網漁業協会会長）の挨拶、および「中国に使して」と題する村山の訪中報告、帆足計（衆議院議員）「貿易協定について」などからなる。著者は元函館高等水産学校校長で、当時は日米水産株式会社常務取締役を務め、日中漁業懇談会の幹事でもあった。このときの訪中の目的は、水産貿易の促進や、黄海における底曳網漁船拿捕問題について中国側と協議することであったが、10月28日になってようやく中国紅十字会顧問の趙安博との面会が実現した。趙の対応は「今日の中、日両国の政情のもとに於ては漁業問題は文化の交流や経済交流の如きものとは違い極めて解決困難の問題である」と厳しく、「台湾の逆徒国民政府と外交関係を結んで居る」吉田政権に対する中国政府の対決姿勢を崩さぬものだった。「補足報告」は一転して中国社会の大変貌の話になり、街がきれいになったこと、蠅を見なかったこと、売春婦がいなくなったことや、「北京にはドロボー・犬・猫がない。ホテル等で窓を開ければなしにしておいても、少しも心配がない」（31頁）状況がくだけた口調で語られる。

（村田雄二郎）

## 1954

### 科学は平和を求めて／柘植秀臣著

東京 大日本雄弁会講談社 1954 230 頁 [XIV-1-44]

著者の柘植秀臣は脳生理学者で、上海自然科学研究所や東亜研究所で活動した経験がある。本書は、柘植が1953年11月にウィーンで開かれた第5回世界平和評議会に参加した後、

あわせてソ連と中国を訪問した記録である。日中関係史の観点からは、柘植がどのように「中国の科学者に会い、中日の科学交流の相談をした」のかが注目される。加えて本書には、中国は「解放後、（中略）組織上、思想上の準備活動の面での成果のほうが、科学研究活動の成果よりも大きかった」（原子核物理学者として著名な銭三強の言）という様子や、ある研究所の図書室には「ソ連の文献以外にも英米のものが非常によくそろえてあった」という柘植の観察が描出されており、当該期の中国における政治、外交と学術の関係を考える上でも有用である。

(吉見崇)

#### モスクワの異風客／西村直己著

東京 産業経済新聞社 1954 206 頁 [XII-3-A-251]

著者の西村直己は静岡選出の衆議院議員（自由党）である。西村は中共貿易促進議員連盟のメンバーであり、1954年6月にストックホルムで開かれた世界平和集会に出席し、その帰途にソ連、中国を訪問した。本書はその記録である。西村は、「共産政治に対しては、わたくしは、強い批判の態度をとっているし、また将来も、これを堅持して行くつもりである」としながらも、「消極的な“反共”や“防共”という立場から、一歩進んで、（中略）“制共”即ちいわゆる共産禍に対してこれをコントロールして行く」姿勢を表明し、日本が「共産圏貿易へも、可能な範囲において、積極的に活路を開いて行かなければならない」と主張した。

(吉見崇)

#### マレンコフ氏の苦笑—ソ連・中国訪問議員団の手記—／松浦周太郎著

東京 全国木材組合連合会 1954 233 頁 [XII-3-A-250]

著者の松浦周太郎は北海道選出の衆議院議員（改進黨）である。本書は、1954年6月にストックホルムで開かれた世界平和集会に出席した松浦が、その帰途にソ連・中国を訪問した手記である。本書には、國務院副総理である郭沫若との会見などが記録されているが、今後の日中間の経済関係をいかに築くべきかという松浦自身の考えが述べられているのも特徴である。それは松浦が木材会社を立ち上げるといった経済人の顔もあわせ持っていたからだろう。松浦は、「中国は農業と重工業の目的を持っている。我々も重工業と農業である。そこで両国が共に発展する線を考えなければならぬ」と説いている。

(吉見崇)

#### わが真実への旅／柳田謙十郎著

東京 青木書店 1954 228 頁 [XI-4-130]

著者はベルリンの「世界平和評議会特別会議」とストックホルムの「国際緊張緩和のための集まり」に出席することを目的に1954年5月に出国し、ヨーロッパ・ソ連の視察を経て7月24日から8月4日まで北京・天津・広州を訪問した。著者を団長とする平和代表団のほか、松浦周太郎を団長とする国会議員代表団も同じ時期にストックホルムの集まりを経て訪中している。著者によれば中国側の待遇は「どうも私たちのグループの方を第一のお客としてあつかっている様子がみえる」というもので、中国側の「平和」問題に対する重視が窺える。訪中期間は短いですが、この間、中国紅十字会会長の李徳全から日本人戦犯釈放の意向がはじめて明らかにされた。中国の視察は天津の紡績工場や天津工業大学、北京郊外の永定河の水利工事など当時とし



ては定番のものが多く、中国は同年10月に新憲法発布を控え、中国政法学会での懇談もアレンジされている。

(池田尚広)

## 1955

### ソ連・中国の旅／桑原武夫著

東京 岩波書店 1955 64頁 [XI-4-129]

著者の桑原武夫は、京都大学教授を務めた仏文学者であり、父の桑原隲蔵は著名な東洋史学者である。1955年、日本学術会議の会員であった桑原は、同会議のソ連・中国訪問団の一員として、両国を視察した。本書は、その訪問の過程で桑原自身が撮影した写真に、それぞれキャプションを付してまとめたものである。なお、桑原が視察の結果に基づいて執筆した「中国における文学研究の動向」や「中国における歴史研究」が、日本学術会議編『ソ連・中国学術視察報告』（日本学術振興会、1956年）に収められているので、あわせて参照されたい。

(吉見崇)

## 1956

### ニコヨン世界の旅／大道俊著

京都 三一書房 1956 156頁

著者は戦前から組合運動、闘争に参加し、3度投獄された経験を持つ。訪中当時は自由労働組合京都支部の財政部長を担当していた。同書は1956年6月にハンガリーのブダペストで開催された世界婦人会議に参加した際の旅の記録である。同地のほかヨーロッパ各地、ソ連を歴訪し、最後に中国を訪問している。中国滞在は同年7月15日から約2週間、訪問地は北京・瀋陽・長春・天津・上海・武漢・広州である。児童病院や自動車工場、紡績工場、労働者の住宅、託児所の見学や「ハエ撲滅」の言説など、視察そのものは当時の中国観察のステレオタイプに近い。一方で、いわゆる知識人によって書かれた「よそゆき」の旅行記ではなく、「日雇のおばさんが、自分の見たまま、聞いたままを率直に語った」（編集部「あとがき」より）という通り、平易な言葉で率直に印象が語られる点が特徴的である。

(池田尚広)

### 社会主義の文化と教育／長田新著

東京 理論社 1956 244頁

著者の長田新は、広島大学教授や日本教育学会会長を務めた教育学者である。1955年、日本学術会議の会員であった長田は、同会議のソ連・中国訪問団の一員として、両国を訪問した。長田によれば、本書は、プラトン・カント・ペスタロッチでできた（長田の）目に映ったソ連と中国の印象記である。長田は「日本子どもを守る会」会長も務めていたため、中国の児童保健委員会のトップである宋慶齡（中国副主席、孫文夫人）とも会見しており、その様子も本書に収められている。なお、訪問団による報告書『ソ連・中国学術視察報告』（日本学術振興会、1956年）には、ソ連の教育に対する長田の論考（「ソ連の社会教育」、「ソ連の就学前の教育

一託児所と幼稚園」，「少年ピオニール団と青年共産党連盟（Y. C. L）」）が収録されているので、あわせて参照されたい。

(吉見崇)

**望郷・北京にありて—日本人の想える／亀田東伍著**

東京 光文社 1956 217 頁 [4846]

1952年10月、北京でアジア・太平洋地域平和会議が開催された。著者は同会議に出席するため日本政府の旅券を得ないまま訪中し、1958年まで長期滞在した。中国第一のホテルに滞在し、必要に応じて自動車が用意されるなど、中国側からの待遇は代表団接待と同様に至れり尽くせりであったという。同書には執筆時における中国の見聞、歴史問題への見解、日本人の中国観、日本とソ連・中国・アメリカとの関係についてなど17編の文章（一部詩作）が収められている。日本代表団の訪中時には度々現地で対応にあたっていた著者だが、同書では美術評論家の北川桃雄（共立女子大学教授）に同行して訪問した大同・敦煌について触れている。

(池田尚広)

**アジアはよびかける：日本国民につぐ十七人の報告／谷川徹三・石川達三著，村松梢風監修**

東京 青木書店 1956 205 頁

日本アジア連帯委員会により編成されたアジア連帯文化使節団の団員による16編を収める。使節団は随行を含め19名で構成され、1956年4月から7月までインド・エジプト・ヨーロッパ・ソ連・モンゴル・中国・北朝鮮・ベトナムを歴訪した。中国について記したのは木下恵介「中国の日本映画祭」、福田豊四郎「敦煌の覚え書」、加藤唐九郎「景德鎮窯を見る」の3編である。杉村春子、乙羽信子とともに日本映画祭に参加した木下によれば、映画祭は中国の16都市で一斉に開催されたものであり、「二十四の瞳」などが吹替で上映された。また中国の社会体制における映画製作事情について日本と比較してもいる。

団員は次の通り。谷川徹三・杉村春子・石川達三・八田元夫・村松梢風・尾崎宏次・星野立子・花柳徳兵衛・松岡洋子・芥川也寸志・福田豊四郎・城戸幡太郎・今泉篤男・淡徳三郎・菊池一雄・本郷新・加藤唐九郎・渡辺義雄・木下恵介、（以下随員）佐藤重雄・北条四男・村松暎。巻末に2か月におよぶ行程がまとめられている。

(池田尚広)

**ソ連・中国学術視察報告／日本学術会議編**

東京 日本学術振興会 1956 299 頁 [5079]

日本学術会議は、1952年10月の第13回総会で、ソ連および中華人民共和国との学術交流の途を開き、学術の興隆をはかる努力をすべきであると決議した。日本学術会議は、まずソ連訪問の準備を始めたが、その過程でソ連訪問の帰途に中華人民共和国も訪問することが決まった。訪問団は1955年5月に日本を発った。訪問団の団長は茅誠司（日本学術会議会長、東京大学教授）が務め、メンバーには日本学士院会員の南原繁（東京大学名誉教授）や大内兵衛（法政大学総長）も加わっていた。1955年6月に北京に到着した訪問団は、3つの班に分かれて、東北・南京・三河閘・上海・武漢・四川・広州を視察した。訪問団の中国に対する印象は、「大学・研究施設は建国なお日が浅いため非常に不完全であり、かつ教育面にも研究者にも人材が少〔な〕い」というものであった。本書の特徴は、当該期の中国における研究・教育制度や、

研究施設・教科内容が詳細に紹介されているところであり、また訪問団のメンバーによる論考（例えば、南原繁「世界観と政治」や大内兵衛「中国経済の発展」）が付されていることである。

（吉見崇）

#### 労働者のみた新中国／平田幸雄著

東京 長谷川書房 1956 167頁

日本労働代表団 56 名は、中国総工会の招待を受けて、1955 年 5 月 1 日の北京メーデーに参加することになった。著者の平田幸雄は、この代表団の一員として、約 1 か月間、中国を訪問した。本書は、その記述内容と筆致からして、読み応えのある旅行記となっている。たとえば、当時の生活水準を示した物価情報は、研究者にとって有益だろう。また、東北（旧満洲）地方に残留した日本人へのインタビュー記録は、日中関係史研究を深める上で十分に活用されるべきものだろう。

（中村元哉）

#### 元軍人団の中国訪問記／訪中元軍人団世話人会編

出版地不詳 訪中元軍人団世話人会 1956 131頁 [Q29]

日本の元軍人団が 1956 年 8 月 9 日から 9 月 15 日まで香港経由で中国を訪問した際の記録である。謄写版による印刷。団長は元陸軍中将遠藤三郎で、このときは 2 回目の訪中であった。前年 11 月～12 月の訪中で「毛主席並に周総理が元日本軍人の来訪を希望して居る」旨を受けた遠藤が呼びかけ人となって、戦後初めての元軍人による訪中が実現した。訪中団員 15 名の内訳は「参観人」13 名（金沢正夫・堀毛一麿・土居明夫・茂川秀和・岡崎文勲・景山誠一・眞山寛二・宮子実・町野誠之・犬飼総一郎・金子陸奥三・内野治嘉・清水廉）と「世話人」2 名（遠藤三郎・多田伊勢男）で、順に広州—北京—長春—瀋陽—鞍山—旅大（大連）—北京—蘭州—武漢—南京—上海—広州を巡った。この間、訪中団は自動車工場・製鉄所・造船所・タンク学校・戦犯収容所などを見学するとともに、各地で懇談会や講演会を行い、北京では周恩来、彭徳懐、毛沢東ら党政府の要人と会見した。第 3 章には「視察者の所見」として、訪中団全員の見聞記を収録する。また、付録として遠藤三郎「元軍人の観たる新中国」（初回訪中の視察談）を収める。

（村田雄二郎）

#### 若い国古い国：教育者の見た中国／松永忠二著

静岡 静岡図書 1956 [VI-7-A-40]

本書は、東京大学教育学部長宗像誠也教授の「お隣の中国でおこなわれつつある偉大なことを、われわれに知らせてくれるのに役立ちます」という一文で始まる。著者は、静岡の教育者であり、中国教育工会の招待で日教組が派遣した教育視察団（1955 年 10 月下旬～同年 11 月下旬）に参加した 35 名のうちの 1 名だった。次の山田清人氏と同じ視察団に参加していた可能性が極めて高い。そのため、本書を山田清人『新しい中国の新しい教育』と比較して読み込むと、当時の視察団の成果を客観的に把握できそうである。

本書の「あとがき」にある次の一節は、社会主義建設に邁進していた中国を過度に美化しつつあった当時の日本の中国観を突き放すものである。貴重な中国分析の一つかもしれない。「し

かし中国の前途には幾多の難問題が山積していることも事実である。生活の向上が国家建設の情熱をわかす一つの源泉であるとするれば、経済建設の順調な発展は、この国の発展に必須な条件であろう。この成否が今の中国の存廃を決定するものともいえる。又この建設にあたっては膨大な資本が必要であろう。この資本をソ連圏の借款援助にのみ依存する事は不可能であろうし、このためには資本の蓄積が必要であるし、自然に人民生活の向上をも抑制する必要が生じてくると思う。」

(中村元哉)

### 新しい中国の新しい教育／山田清人著

東京 牧書店 1956 206頁 [VI-7-A-39]

著者の山田清人は、1906年生まれの教育学者（国立教育研究所所員）である。本書は、その著者が日教組の派遣した中国教育事情視察団（1955年10月～同年11月）で見聞した内容をまとめたものである。

本書で特筆されるべきは、高等教育機関（北京大学）のみならず、当時のあらゆるレベル、あらゆる種類の教育機関について記録を残していることである。専門学院（農業機械化学院・中央体育学院・東北工学院・東北地質学院）、中等専門学校（北京機器製造学校）、中学校（北京女子中学・ハルピン第一中学）、小学校（北京市第一実験小学）、幼稚園（北海幼稚園・北京第一幼稚園）の視察内容はもちろんのこと、少数民族の教育機関（中央民族学院）、大人の通う夜間学校、職場に設置された余暇教育のための学校、農業合作社と農村の学校、人民共和国に入ってから設置された新しいタイプの学校（北京舞踏学校）の視察内容についても克明に記録されている。あわせて、教員の養成システムや教員の生活実態についても記述がある。

本書には、中国共産党の宣伝内容が多分に含まれている。それでも、「教師生活の過去と現在」で紹介されている教員たちの記憶は1940年代から1950年代にかけての社会の実態の一部を生々しく伝えている、とも言えよう。

(中村元哉)

### 音楽の旅：欧州・ソヴェト・中国／山根銀二著

東京 岩波書店 1956 287頁 [IX-5-E-20]

著者はベートーベン研究などで知られる音楽評論家で、1955年2月から1年半にわたる欧州、ソ連、中国への「音楽の旅」の記録である。日本では戦前から西洋音楽が普及していたとはいえ、戦後まもなくは、まだ外国旅行が身近な存在ではなく、音楽研究を専門にする著者ですら初の渡欧であった。神戸から貨物船アンデス丸に乗ってジェノバに上陸し、ミラノ・フィレンツェ・ダルムシュタット・パリ・ミュンヘン・アンスバッハ・バイロイト・ベルリン・ウィーン・ザルツブルグ・プラハをたずねる。ダルムシュタットやベルリン・ドレスデンなど一部の都市では空爆による破壊の跡がまだ生々しいが、欧州では音楽の復興が進みつつあった。著者は、イタリアのオペラ、バッハ音楽祭、バイロイト音楽祭、ベルリン音楽祭、ウィーンフィルの演奏会、モーツァルト音楽祭などを精力的にめぐりあるき、最新の音楽事情を渉猟する。そこでは、マリア・カラスやバーンスタイン、カラヤン、カール・リヒター、ブルーノ・ワルター、カール・ベーム、カルロス・クライバーらが活躍していた。十二音技法や無調性の音楽も流行をみせていた。

現地の音楽界と交流するうちに、著者は日本の音楽評論家として認知されていく。だが、日本の音楽については、明治以後は西洋の模倣に全身全霊を傾け、自らが立脚してきた伝統さえも切り捨ててしまったのでは、と疑問をいだくようになる。そうした旅の途中でもたらされたソ連と中国からの招待は、著者の認識に新たな扉を開くことになった。ソ連では、対外文化協会の招きでモスクワとレニングラードを訪れ、ボリショイ劇場のオペラや国立モスクワ音楽劇場のバレエなどを観賞した。そのあと訪れた中国は、ちょうど「推陳出新、百家斉放」という芸術開拓キャンペーンの真っ最中だった。中国音楽家協会主席呂驥や馬思聰・孟波らに歓迎され、北京—天津—南京—上海—杭州—武昌—広州を周遊した著者は、北京の中国少年児童劇団・人民劇場・長安劇院・民族音楽研究所・北京師範大学音楽系、天津の中央音楽院・雑技団の曲芸、南京師範学校音楽系、上海の音楽学院・交響楽団・中央実験歌劇団など、豊富な見学プログラムをとおして、「無技巧にすぎると思えるほどの真実主義」で新しいものを創りださんとする中国音楽界のエネルギーに感化される。そして、北京の国際クラブで講演を行った著者は、「電子音楽のように形式主義的な表現におちいつてはならぬが、西洋の技法を全面的に否定してはならない。伝統を現代的なものへと成長させるべきである。新しい中国は音楽方針の樹立の点で見事に問題を処理している」として、伝統を基盤に独自の芸術をうちたてようと試みる中国の現状に評価を与えた。

(辻直美)

## 1957

### 新しき国 新しき教会：中国教会に使いして／浅野順一著

東京 日本基督教団出版部 1957 111頁

著者は1957年4月下旬から5月下旬まで訪中した中国教会問安使節団(15名)団長である。帰国後各媒体に発表した数編が一冊にまとめられている。中国側の招請は中国三自愛国運動委員会の主席呉耀宗である。「三自」とは、キリスト教会の自治・自養・自伝のことであり「すなわち教会が外国ミッションの支配から解放されて、自ら教会を治め、自らの経済において立ち、自らの力によって伝導する」という「解放」後の独立志向を指す。一方で、著者が中国の教会が持つ弱点を「共産主義国家に於ける教会の立つ神学的基盤の問題」「中国古来の精神文化との対決」という二点にまとめるように、共産政権における宗教信仰の在り方は当時の中国観察における一つの焦点であった。著者は観察において「解放」の成果を率直に認めながらも、教会が政府に同調的である現状について、「しかし国家が福音に反せざる政策を現に実行して良い成績を着々あげている今日、教会は国家に対して何を好んでいたずらに消極的批判的であってよかろうか」とその楽観ぶりに疑問を呈してもいる。同書の後半には、三自愛国運動の指導者の一人である丁光訓(南京金陵協和神学院院長)が1956年に世界学生キリスト大会(於：西ドイツ)で行った講演の翻訳も収録されている。

(池田尚広)

### 中共の放送事業視察記／田尻泰正著

出版地・出版者不明 1957 67頁

著者の田尻泰正は、東亜同文書院の卒業生であり、当時、朝日放送東京支社放送部次長を務めていた人物である。その著者が、梅益中国広播事業管理局長から日本民間放送現業者視察団

が招待された際に、その団長として約 40 日間、北京—ハルビン—長春—瀋陽—西安—武漢—上海—杭州—広州などを訪問することになった。

この視察の主たる目的は、中国共産党がどのように放送事業を整備しているのか、ということだった。本書には北京放送局の番組一覧が掲載されており、一定の資料価値がある。しかし、それ以上に目を惹くのは、著者のジャーナリストとしての客観性を重んじる態度である。同書には、「昔のように極端な貧富の差はなく最低の生活は保障されている。だがもう昔のように自ら考え、自ら欲し、自ら行う自由はない。つまり中共は地獄でもなければ天国でもない」(59 頁) という一節がある。注目されるべき観察眼であろう。

(中村元哉)

### ソヴェト紀行／徳永直著

東京 角川書店 1957 228 頁 [5020]

本書は、日本共産党員の作家である徳永直が、1954 年 12 月に開かれた第 2 回作家大会に参加するためソ連を訪問し、その帰途に中国に寄った記録である。徳永は、中国で郭沫若・茅盾・周揚・丁玲・老舍・趙樹理・蕭三・馮雪峰・田漢など多くの作家、詩人、演劇関係者に面会した。本書には、その様子が臨場感あふれる筆致で描かれている。

(吉見崇)

### 麦積山石窟／名取洋之助著 (写真とも)

東京 岩波書店 1957 138 頁 [I-1-D-125]

日本のフォトジャーナリズム (報道写真) の先駆者・名取洋之助の撮影による麦積山石窟 (以下「麦積山」) の記録で、1950 年に刊行が始まった岩波写真文庫の一冊。

名取が麦積山を撮影したのは 1956 年秋のことである。現甘肅省天水市の東南 45 キロの地点に位置する麦積山は、堆積した麦山に似ることからその名があり、高さおよそ 142 メートルの山の崖に 5 世紀から造営された 190 余りの石窟がある。中国では、1952 年から本格的調査が実施され、1954 年には調査報告 (『文物参考資料』1954 年第 2 期および文化部社会文化事業管理局編『麦積山石窟』中国・文化部社会文化事業管理局、1954 年) が刊行されていた。撮影にいたる経緯は不明だが、長与善郎から石窟の存在を聞いたという。

名取は、魯迅没後 20 年記念祭 (56 年 10 月 19 日、長与が日本側代表として挨拶) に日本作家代表団とともに参加し、その後一行と別れて天水に向かった。11 月 23 日から 25 日までの 3 日間、石窟の文物保管所長の部屋に泊まりこんで行われた撮影は、懸崖にわたされた梯子や栈道をつたいながらの危険と隣りあわせで、かつ写真機の故障で一部作業のやり直しをせまられるなど、決して楽な作業ではなかったが、後年「仕事の鬼だった」と評される名取の爆発的なエネルギーが、悪条件下での撮影完了を可能にさせた (小林勇「名取洋之助：爆発するエネルギー」『折り折りの人 第 3』朝日新聞社、1967 年、140-143 頁)。

本書には、石窟の塑像や壁画、また麦積山の山容を撮影した 80 余点のモノクロ写真が掲載される。「不思議なやわらかいほほえみをたたえた『アルカイック・スマイル』にひきつけられた」と名取は記しており、自然の光線を生かした塑像の写真は、序文を寄せる和辻哲郎に「推古仏の源流」を想起させた。写真家・木村伊兵衛によれば、名取は常に「それは何かと疑問をもたせること」にこだわっていた (木村伊兵衛「名取洋之助さんの足跡」『朝日新聞』1962 年 11 月 24 日、11 頁)。よって、本書の魅力はむしろ、懸崖にはりめぐらされた栈道、巨大な仏

像の顔近くにまで無遠慮に打ち込まれた栈杭など、特異な石窟の容貌を捉えたカットにこそあり、おそらく名取の興味関心もそこにあつたとみられる。

序文は和辻哲郎、巻末には、石窟全図、主要石窟の見取り図、鄭振鐸による解説（原文は『麦積山石窟』1954年刊所載）、町田甲一による中国彫刻史年表、吉川幸次郎「杜甫『山寺』について」などがある。撮影通訳は葉渭渠がつとめている。

（辻直美）

**二つの中国はない：日中国交回復国民会議訪華使節団中国訪問記／日中国交回復国民会議  
東京 日中国交回復国民会議 1957 131頁**

日中国交回復国民会議は、小畑忠良を団長として、1957年9月28日から同年10月31日まで訪中した（北朝鮮への訪問日程も含む）。中国人民外交学会との「日中国交回復に関する共同声明」（同年10月10日）や周恩来総理・陳毅副総理との会談記録が収録されており、本書は一種の公的な記録とも言える。

本書の後半には、この訪中団に参加した個々人の感想が綴られている。「戦犯管理所を訪ねて」（土井裕信）には、古海忠之（元満洲総務庁次長）が服役者30名の共通の心境として次のように述べた、と書かれている。「われわれは日本の動向に深い関心をもっております。最近岸内閣が反中国政策をとっていることは非常に残念であります。（中略）私は岸首相とは友人として仕事を進め参りましたが、皆さんが帰国の節は“古河は変わった”と御伝え願います」。古海を古河と改変するような記述から当時の政治性その他を読み取るのか、日中関係史研究者の手腕が試されるだろう。

（中村元哉）

**日中の国交回復へ：日本社会党訪中親善使節団報告書／日中国交回復特別委員会編  
出版地不明 日中国交回復特別委員会／日本社会党教宣局出版部 出版年不明 180頁  
[Q2030]**

社会党訪中親善使節団（1957年4月10日～4月26日）の報告書である。団長は党書記長浅沼稻次郎、団員は日中国交回復特別委員会委員長勝間田清一、国際局長佐多忠隆、企画局長曾禰益、外交部長穂積七郎、日中国交回復特別委員会副委員長山花秀雄、政策審議会副会長兼事務局局長成田知己、日中国交回復特別委員会事務局局長佐々木良作、随員は米山雄治、佐藤拓弥である。報告書は「報告概要」「正式会談報告」「共同コミュニケ正文」「主要なる声明、挨拶、講演要旨」で構成されている。この報告書によれば、中国側と9つの分科会に分かれて意見交換したとのことである。その分科会とは、日中国交回復に関する基本方針、アジア並びに一般国際間に於ける共通の問題、日本と中国との経済提携、貿易の一層の促進、漁業に於ける協力、技術交流、文化交流、気象及び郵便業の協力、居留民の往来・遺骨の相互送還である。同報告書は、アジアの平和外交、すなわち「日中の貿易拡大、通商、漁業、定期航路の諸協定」から国交回復を成し遂げるとし、「すでに今日、中国を知らずして、中国を抜きにして、アジアの平和と社会主義的な経済建設を語る」のは「許されない」と訴えている。

（中村元哉）

生きていた教会・日本キリスト教代表中国問安使節団報告／日本基督教代表中国問安使節団  
報告書編纂委員会編

東京 キリスト新聞社 1957 80 頁

1957年4月25日から5月20日まで広州—武漢—北京—瀋陽—鞍山—撫順—天津—濟南—南京—蘇州—上海—杭州を訪問した標題使節団の団員13名による報告。使節団は団長浅野順一、副団長植村環ら15名で超教派的に構成されている。滞在中は各地の教会や神学校訪問とともに刑務所、工場、橋梁工事、農村、史蹟、寺院、劇場といった一般的な見学が組まれている。執筆者によって訪中の感想はまちまちだが、教会と国家の関係についての記述は比較的多く関心の高さが窺われる。なかでも「新中国」建国当初において行われた教会関係者の弾圧については、宗教と政治の確執ではなく、あくまでも「反革命」に対する処置であったとの見解が貫かれているようである。一方で、YMCAの副総幹事李寿葆が「私たちは勿論マルキシズムのイデオロギーを信奉してなどいない」「ただし現在の政府の実際に行っていることを見ると、これが正しい政府であり、真に人民のための政府であることを否定できない」（井上良雄「中国における教会と国家」より）と語ったとあり、三自愛国運動がはじまって以後も宗教と国家の問題は依然難しいものようである。附録として「中国基督教三自愛国運動委員会よりのメッセージ（一九五七・五・一五）」が収録されている。

(池田尚広)

1958

写真集 見てきた中国／濱谷浩著（写真とも）

東京 河出書房新社 1958 122 頁 [2505]

著者は、新潟県高田市（現上越市）を拠点に活躍し、写真界のノーベル賞と言われるハッセルブラッド国際写真賞をアジア人として初めて受賞するなど国際的評価を得た写真家。1956年に日本文化人中国訪問団の一員として訪中した際に撮影した写真集である。「あとがき」によれば、できるだけ「ふだん着」の中国を紹介したという。雑踏にあふれる大衆、人びとの生活の断片など、新旧が雑多に入りまじる「新中国」に生きる人間がテーマである。百花齊放・百家争鳴の時代だったこともあり、国境・軍事施設の撮影は禁止されたが、他はほぼ著者の希望がかなえられたようだ（毛沢東に会いたい、との願いだけは実現しなかった）。万里の長城・紫禁城など歴史遺産に始まり、広州・上海・西安・杭州・蘭州・カザック部落・ウルムチ・北京で撮影された町並みや人びとの暮らし、最後に国慶節のパーティ（北京飯店）と園遊会（頤和園）の様相を収録する。毛沢東の中国共産党第八回全国代表大会挨拶（抄）も掲載。序文を井上靖、装丁を洋画家の高橋忠弥が手がける。

(辻直美)

1959

新中国見学記：一教師の視察報告／田中剛著

東京 理論社 1959 173 頁 [Q2038]

著者は東京商科大学（現在の一橋大学）教員養成所を卒業した中学教諭で、訪中時は鳥取県中学教職員組合書記長だった。本書はその著者が1957年に日本教職員組合海外教育視察団の



一員として、約 50 日間訪中した際の視察記である。恩師上原専禄の紹介で本書を上梓することになったという。本書の記述から察するに、著者は戦前中国で教職につき、満洲にも一時滞在しており、敗戦後引き上げたという経歴を持つ。そのため、中国語の会話が少しできたようだ。視察団の旅程は、バンコク—ラングーン—昆明—北京—瀋陽—撫順—鞍山—長春—ハルビン—西安—南京—上海—杭州—広州で、北京では周恩来の接見もあった。最も長く滞留した北京では、鉄道学院・中央民族学院・北京監獄・中華全国総工会・北京体育学院・北京師範学院・北京大学・故宮博物院・農業生産合作社・中国教育工会・新民主主義青年団を訪問している。全体として、訪問先は大学や小中学校などやはり教育関連の施設や組織が多い。視察団がハルビンに来たことを新聞で知った残留日本婦人約 50 名が視察団に会いに来たなど、印象的なエピソードも記される。筆者は中国人の通訳の姿にも場面場面で注意を向ける。「中国では私的な会話は別として、公的な会話は、どんなに日本語のできる人でも、絶対に日本語を使わない」（33 頁）とは、戦前に日本と関係のあった中国人が置かれていた微妙な立場をうかがわせる観察である。

(村田雄二郎)

#### 訪中所見／古井喜実・井出一太郎・田林政吉著

出版地・出版者不明 1959 104 頁 [7010]

松村謙三に随伴して 1959 年に中国を訪れた衆議院議員の古井喜実・井出一太郎、日本長期信用銀行役員 of 田林政吉による訪中記。松村一行は、著者のほか、竹山祐太郎や田川誠一、報道関係者 7 人などで構成される計 17 人。一行は、1959 年 10 月 18 日から 1 か月半にわたって中国に滞在し、中国の要人と政治会談を行ったほか、北京—西安—蘭州—三門峽—洛陽—重慶—昆明—成都—武漢—上海—杭州での実地観察を通じて、中国の国家基本建設や経済計画などについて政策調査を行った。この見聞に基づき、石橋内閣で農林大臣をつとめた井出が農業生産と人民公社の部分を、金融を専門とする田林が工業生産、国内商業、対外貿易について、その他は古井喜実が執筆を担当している。総括として、「中国の建設はめざましく、共産主義への賛否・好悪は別として、それは素直に認めなければならない」とし、中共政権についても「基礎はむしろ強化されつつあり、国内の困難や矛盾で崩れる兆候は見あたらない」として、「新中国」の基盤はもはや揺るがし得ないことを指摘している。そして、「中国は日本に対し、友好関係を望んでいる。今日の日中関係は誰が考えても不自然であり、何時の日かこの姿は是正されなければならない」と、関係改善に向けた日本側の努力の必要性を提唱している。

(辻直美)

#### 上海にて／堀田善衛著

東京 筑摩書房 1959 208 頁 [15736]

堀田善衛は 1945 年 3 月から上海に滞在し、終戦後は中国国民党宣伝部に留用され、翌年 12 月日本に帰国した。本書は、1957 年 10 月の日本文学者代表団で上海を再訪した後に書かれたものであり、戦中戦後の上海滞在時の回想を含む。

代表団団員は堀田のほか中野重治・井上靖・本多秋五・山本健吉・十返肇・多田裕計だった。滞在したのは 10 日前後だが「第一日目を除いては、ほとんど計画されていた見学には参加しないで、ひとりで町の三輪車を拾い、電車、無軌道電車〔トロリーバス〕に乗り、あるいは徒歩で、勝手知った町々を歩き回った」。代表団が宿泊した錦江飯店が、かつて日本の十三軍司令

部のあった建物ではないかと若い中国人通訳に尋ねた堀田は、「むかしのことは知りませんね」と返され、この青年が敢えて知らないことにしているのではないかと自問する。一方、復旦大学で堀田自身が上海の「属性」と認めてきた乞食・淫売・浮浪者・失業者・ギャング・泥棒・スリ・カップライ・外国人・外国兵の話をしたところ、若者にはまるで理解されず、確かな時間の経過というものを実感させられてもいる。

再訪時の上海について印象を述べる時、かつての工場労働者や子どもの窮状が改善された現状を実見しながら、堀田は自身の感じる「都会の魅力」には“貧窮”というものがついて回っていた。こうした終戦前後と1957年の再訪を行き交う堀田の所感に「惨勝・解放・基本建設」を経て変化著しい上海に対する内面の複雑な心境が現れる。また終戦翌年に堀田は戦中の対日協力者とされた中国人の死刑執行を目の当たりにしているが、「“敵”と“味方”と“漢奸”の、この三者の流した血が沈んで行って、その上に更に、解放のために流されなければならなかった血が加わり、歴史という、どろどろのアスファルトか、溶岩流のようにもどす黒い、すぎまじい〔ママ〕ものが目に見えて来るようになって行った」と述べている。戦後派作家として知られる堀田の原点には戦中から戦後にかけての上海での体験があるとされるが、同書は自身と中国人との間にある戦争責任を孕んだ個人の自省と占領当時の上海に対するノスタルジーを断片的に伝えている。

(池田尚広)

## 1960

### 文学者のみた現代の中国・写真集／木村伊兵衛・中島健蔵編

東京 毎日新聞社 1960 120頁 [3027]

1956年から1959年にかけて訪中した文学者が自ら撮影した写真が収録されている。「あとがき」(中島健蔵)によれば、1960年3月に東京の数寄屋橋で写真展が開催された(日本文芸家協会、日中文化交流協会主催、富士フィルム後援)。明確に記されていないが、同書は同展出品作の抜粋であろう。展覧会の選にあたったのは写真家の木村伊兵衛・渡辺義雄・田村茂、撮影者は青野季吉・井上靖・宇野浩二・江間章子・小田嶽夫・草野心平・多田裕計・十返肇・中島健蔵・中野重治・野上弥生子・堀田善衛・本多秋五・山本健吉の14名である。撮影場所は北京・上海・武漢・広州のほか、蘇州・重慶・延安・新疆ウイグル自治区・蘭州など各地を含む。後半は各撮影者による散文(一部詩作)である。

(池田尚広)

### 中国大陸を見聞して(「国民外交シリーズ」第18号)／松村謙三〔述〕

東京 国民外交調査会 1960 38頁 [6007]

虎ノ門・霞山会館で開催された国民外交調査会主催による松村謙三の講演会録。松村は1959年10月18日から12月2日まで、竹山祐太郎・井出一太郎・古井喜実ら衆議院議員やメディア関係者ら一行17人で中国を訪れた。岸派に対抗する自民党非主流派巨頭による松村の訪中は、当時日中両国において注目を集めた。松村は北京で、周恩来や陳毅と率直な意見交換を行い、とりわけ周とは三度にわたる話し合いを持った。アメリカや岸政権に強い反感を抱く中国側ではあったが、「両国の政治体制を互いに尊重して、相侵さぬというならば、文化、経済の交流は当然行われるべき」との方向で、松村ら一行とは意見の一致を見た。陳毅は台湾について、

「建設が進めば、台湾の方から一緒に仲間に入れてくれと言ってくるに決まっている、五年でも十年でも、やってくるのを待っている」と武力は用いない方針を述べた。中国側の姿勢について松村は、「政経不可分」とは言うものの、日本の認識する「政治」と中国の認識する「政治」とは異なっていた」と見解を述べている。

松村は、蘭州—西安—洛陽—昆明—杭州—成都—重慶—武漢などを視察し、「とにかくほかでかいことを考え、やるという中国民族の特性」を研究しなければ将来の中国のあり方はわからない、と感じる。そして、アメリカやソ連と同じくらいの面積を持ち、中央集権、近代工業化を進める中国を世界はもはや等閑視できない、国連にも入れなければ国連の機能をそれだけ薄めることになる、「平和を談じ、軍備縮小を談ずるのに、中国を除外して、世界の平和が語れるか、世界の軍縮が語れるか」と、アジアの問題と大きな関連をもつ中国の問題について、日本は諸外国とともに考えていくべきである、とその信念を述べている。

(辻直美)

1961

#### 新中国に奇蹟はない／日本中国友好協会第三次訪中代表团

出版地・出版者不明 1961 32頁 [Q2051]

宮崎世民を団長に、日本中国友好協会各支部（山梨、伊勢崎、大牟田、高知、石川、釜石、杉並、神戸、岐阜）の支部長・事務局長・常任理事など10名の訪中記録。一行は4月25日に羽田を発ち、香港を経由して広州—北京—瀋陽—三門峽—洛陽—上海—杭州—武漢—長沙—広州を経て、6月11日に帰国した。活動内容は項目ごとに、工業建設、農村人民公社、魯迅記念館、都市人民公社、文化娯楽と労逸結合、学校教育、人民大会堂、上海工人文化宮と少年宮、北京メーデーに参加して、上海の大世界、上海労働運動史、北京児童病院、郭沫若氏との会見記、栄光の里“韶山”を訪ねて、とまとめられている。目を引くのが「中国農業の災害について」で、1959、60年と続いた旱魃が「中国百年来のもの」で、広州から北京までの車窓からは「殆ど上作とみられる麦はなく種子取りさえむずかしい様な畠が見渡す限り見られる状況がしばしばであり、今年も相当な被害で〔中略〕解放前であったならおそらく餓死者は、二千万人から三千万人位出て相当な困乱があったろうと想われる」と記録されている点で、被害の大きさをかなり正確に把握していたことがわかる。

(関智英)

#### 人民の国、中国の婦人たち：私たちの報告：1961／日本中国友好協会訪中婦人代表团

東京 日本中国友好協会訪中婦人代表团 1961 56頁 [Q2041]

日本中国友好協会訪中婦人代表团が1961年6月14日から7月16日まで北京—天津—上海—杭州—広州を訪問した際の記録である。代表团は、中華人民共和国全国婦女聯合会副主席の許広平らと会談している。この報告書には北京市婦産医院授乳室、虹橋人民公社などの現状に対する感想が綴られ、女性の視点から当時の中国情勢が記されている。代表团団員は河崎なつ（団長）・川上とし子（秘書長）・梶谷和子・山本信枝・立木千秋・村上あい子・苔米地章江・武藤光子・宅島綾子・佐藤スミ・櫛田鉦二郎（作業員）。

(中村元哉)

躍進する中国を訪れて：訪中期間 1960. 12. 3～1961. 1. 11／民主々義擁護群馬県民連合訪中  
代表団編

出版地不明 民主々義擁護群馬県民連合訪中代表団 1961 62頁 [Q2049]

民主主義擁護群馬県民連合訪中代表団が角田儀平治（民擁連議長で1960年4月から5月の日中友好協会訪中団の一員でもあった）を介して1960年12月3日から翌年1月11日まで中国を訪問した際の記録である。主な訪問地は、広州―北京―瀋陽―撫順―鞍山―天津―三門峽―洛陽―鄭州―武漢―南京―無錫―上海―杭州だった。一行は、北京で陳毅副総理兼外交部長、郭沫若平和委主席、廖承志 AA 連帯委主席らと懇談し、天津で中国人民保衛世界和平委員会天津市分会と共同声明を出した。報告書は「社会主義建設における大躍進が保障されている」と述べ、掲載された写真も中国の発展ぶりをイメージさせるものだった。たとえば、鄭州の人民公社での「土法」を紹介したページでは、「技術の神秘性」を打破することが技術革新の道だと言って労働者も技術者も一つになって学習と実践に取り組んでいる」と肯定的に記されている。当時の日本において中国認識がどのように形成されていったのかを知る上で、大いに参考になる一節であろう。代表団団員は石黒寅亀（団長）・安藤安次郎（副団長）・金子満広（副団長）・布施甲子郎（秘書長）・久保田朝雄・佐藤清一・鈴木正・林金衛・畑利・猪上輝雄。  
(中村元哉)

1962

日中問題の焦点：再び中国を訪ねて／田川誠一著

横須賀 新風会 1962 64頁

松村謙三の訪中団（1959年）に随伴した田川誠一が旅の合間に書きとめた記録で、松村と中国側（周恩来・陳毅・廖承志）との会談や交渉の経緯に焦点をあてる。人名や用語の解説もあり、松村訪中の意義を理解する一助となる。

松村一行と中国側は、両国が積み上げ方式によって政治経済関係を発展させ、関係の正常化に有利ならしめるべきである、との合意事項を発表しているが、著者によれば「政経不可分」の原則をめぐって両者には考えの相違が存在し、合意事項の形成にいたるまでに、かなりの駆け引きがあった。中国側は「政経不可分」の原則を譲らず、日本側も中国側が主張する政経不可分論をのんだような印象を与える点には同意できなかったためである。著者は、最後に周恩来が「私は中国共産党の幹部であり、松村先生は日本の自由民主党の幹部であるから見解の一致しないのは当たり前である。そうした前提に立って、両国の友好を前進させ、平和共存をし、親善関係をはかっていくことに意見の一致を見たのです」と述べたことを挙げて、見解の相違はあったものの、両国が積み上げ方式によって正常化をはかるといふ、関係打開の一つのチャンスをつくり得た点で松村の訪中には意義があったと、評価を与えている。

(辻直美)

1964

世界を動かす巨人に会って：中共を視察して祖国日本を想う／木村武雄著

米沢 米沢交友会 1964 144頁 [Q2035]

著者は山形県米沢市出身の政治家で、1936年衆議院議員に初当選した。日中戦争が始まると、同県鶴岡市出身の石原莞爾に弟子入りして東亜聯盟運動に加わり、中国に6年間滞在した経歴を持つ。本書は二部構成で、第一部「世界を動かす巨人に会って」は欧米歴遊後の講演録であり、第二部「中共を視察して祖国日本を想う」が、1964年9月～10月に北京—西安—重慶—武漢—上海—南京—杭州—瀋陽を巡った旅の印象記である。序文は佐藤栄作による。著者は革命後の中国を日本の明治維新と重ね合わせて追体験しており、中国の核実験成功についても、「勤儉建国、勇奮祖国の民族運動」の発露だと評価している。また、戦前の上海滞在経験との対比で、治安の向上や民生の安定を好意的に観ている。とくに、道路の清潔さや蠅・蚊の撲滅など公衆道徳の普及ぶりに瞠目し、その功を「教え導く政治」に帰しているが、他方、「中国人の生活水準が今の日本に追いつくまでには百年間かかるだろう」という陳毅副総理の言葉に賛同し、「貧乏人が貧乏人のままで、統一した政権をつくったのが社会主義なのであります」（137頁）として、次元の高い政治をしている日本にとって、中国畏れるに足らずと結論づけている。

（村田雄二郎）

### 中華人民共和国建国十五周年慶祝日中友好協会派遣第九次訪中団記録

出版地不明 出版者不明 1964 25頁 [Q2050]

人民共和国成立15周年の国慶節に参加するため組織された訪中団の記録。公式記録ではなく、各団員手許の資料として200部のみ作成・配布された。団長松本治一郎、副団長宮崎世民、団員に角田儀平治、檜崎彌之助ほか。一行は9月26日に羽田を出発し、香港を経て広州—北京—西安—延安—鄭州—武漢—南京—上海—広州を巡り、10月30日に香港より帰国した（団長の松本は健康上の理由で10月10日に北京を離れた）。10月11日には、1945年に人民解放軍に医師として参加し、50年に脳膜炎のため死去した中村雄三「烈士」の遺骨伝達式が催された。上海での民族資本家との懇談会で記録された、陳銘珊（上海信誼薬廠々長）・貝竹韻（黄浦区手工業局副局長）・蔣達寧（上海市工商業聯合会副秘書長）の発言要旨は、1940年代から50年代にかけての上海経済界の事情を伝えている。宋子文の「民族資本がやれなければ、倒したらよい、アメリカから工場を持って来る」との発言に皆が怒ったこと（陳）、「共産党が来るときは恐かった」（貝）、といった発言は興味深い。

（関智英）

### 中国訪問から帰って／本田良介〔述〕

東京 ジャパン・プレス・サービス（国際事情研究会） 1964 16頁 [XI-6-B-d-57]

アジア・アフリカ・ジャーナリスト協会日本協議会代表団長として1964年に中国を訪問した著者による国際事情研究会第76回月例研究会における講演の要旨。著者ら一行は同年9月末から約1か月間、北京・上海・広州のほか東北地方のハルビン—長春—瀋陽—鞍山—撫順を視察した。現地では、ソ連の経済援助打ち切りを「自力更生」によって乗り越え、資材やエネルギーをほぼ自給できるようになった中国工業の発展ぶり、また反修正主義を基調とした社会主義教育、文化革命など、対ソ連を意識した中国の国家建設や思想運動の動向に着目している。一行は、フルシチョフの失脚と中国の核実験という世界的ニュースにも現地で接した。中国が最初の核実験を行ったのは10月16日だったが、その前日の15日夜、一行は中国伝播事業局長・梅益らによる歓送会に招かれ、中国側から「中国が核実験をすれば、日本の反響はどうか」との予告めいた質問を受けた。そして、翌16日にはフルシチョフの失脚が発表された。

両者の関係性について著者は、直接の関係はないとしつつも、「ソ連の側からいって、中国の核実験切迫がフルシチョフの失脚を早めたということがいえるかもしれない」との見方を提示している。

(辻直美)

1966

### 中共を視察して／大宅壮一 [述]

出版地不明 出版者不明 1966年 54頁 [Q2052]

大宅壮一を団長に大森実、三鬼陽之助、藤原弘達、梶山季之らノンフィクションライターで組織された中国視察団の経験を、大宅が警視庁警務部で語った講演録（財団法人自警会の雑誌『自警』第48巻第11号、1961年11月に同タイトル・ほぼ同内容の講演要旨あり）。大宅らは日中旅行社に60万円を払って視察を実施したが、これに対し「ソ連の倍くらい」で「暴利をむさぼっておるわけです」と手厳しい。一行には「通訳と称するのが」についており、中国入国後、最初に睨まれたのは移動の自動車の中で「支那の夜」を歌った藤原弘達であった。まもなく大宅自身も「毛沢東の説教」に辟易して発した「毛沢東はモウタクサンダ」との発言で、通訳より嚴重抗議を受ける。「あの国は外国に対して非常な憎しみというのを持っており、その憎しみがあの国の原動力になっている」という指摘や、文革についての「文化とは何のかかわりもない。文化の名において文化を破壊する。〔中略〕一種のクーデターです」との説明は、いわゆる「親中派」の見方とは一線を画する。よく知られる「砂利革命」についても触れ、「一番活発な発言をするのは中学生から高校生〔中略〕しかも中学生、高校生の中で猛烈に強いのは女です。女の砂利です。そういう者をうまくおだてているわけです」と紅衛兵の文革における役割を明快に説明する。さらに映画に現れた毛沢東を見て、「老境というよりももうろくに近い。一節によると脳軟化症にかかっているという説もある」と、最後まで大宅ならではの批判精神溢れる視察記録となっている。

(関智英)

### 中共雑観／小坂善太郎 [述]

出版地不明 内外情勢調査会 出版年不明 57頁 [Q2037]

1966年8月末から約1か月中国を訪問した衆議院議員の講演記録である。著者は自民党内のいわゆるハト派議員であり、1972年の日中国交正常化の際は、日中国交正常化協議会会長として、田中角栄首相訪中の環境づくりにも貢献した。本書では、文化大革命が始まったばかりの時期に広州—北京—洛陽—武漢—上海—杭州を訪れた著者の見聞や印象が語られる。小見出しを順に掲げると、「毛一色の中に入る」「一闘、二批、三改」「大革命への三つの原因」「人間第一、人海戦術が中心」「紅衛兵の五つの要求」「非常に貧しい民情」「強調される精神面」「積極的な産児制限」「都市と農村の格差」「徹底した均衡財政」「まず国内引き締め」「根本は憎しみの哲学」「日中人事交流にちゃんとしたルートを」「白眼をもって見ず、青眼をもって見よ」。産児制限について、著者が「一般の産児制限の器具を使うほかに、晩婚の奨励をやっている。二十五歳ぐらいまでは女の子も独りである。法律は十八歳からだそうですが、男は三十歳ぐらいまで晩婚でがんばれということだそうです」と述べるのは、文革が産児制限を緩めたとの通説に照らして、やや意外である。また、経済の専門家に対し、財政について詳しく

説明してほしいと苦言を呈したところ、わきにいた人が「いま、われわれはねらわれているのだ。みんなから攻められようとしているときに、内輪のことはあんまりいえませんよ。日本だって戦争のときはそうだったでしょう」と発言するくぐりには、文革初期の緊迫した雰囲気を与える。

(村田雄二郎)

#### 見てきた文化大革命／小坂善太郎〔述〕

東京 新財政研究会 1966 50頁 [Q2031]

本書は、小坂善太郎（自由民主党衆議院議員）が川野（参議院議員）と約4週間訪中し、帰国後翌日の1966年9月26日に文化大革命の現状について語った記録である。王晓雲らの出迎えをうけた訪中行程は深圳—広州—北京—洛陽—武漢—上海—杭州—広州というルートで、北京では周恩来・陳毅・郭沫若・廖承志らと接見している（毛沢東と林彪には会う機会がなかった）。小坂らは、文化大革命が発動された理由はベトナム戦争によるのではないかと推測している。また、この訪中で中国側が具体的に述べた数字は「1965年の穀物の総生産が2億トン」だということと「人口が昨年で7億」だということだけだったとも述べている。さらに、中国側は佐藤首相が政経不可分の原則を支持して国交回復することはあり得ないと見立てている、とも記している。

(中村元哉)

#### 東風の中を行く／西浜二男著

東京 真誠書店 1966 172, 16頁 [Q2033]

著者は訪中当時、目黒区議会議員（社会党）で国際貿易促進議員連盟の目黒区議会事務局長を務めていた。本書は、訪中日本友好視察団第五団員の一人として、1965年10月22日から11月19日まで香港—広州—武漢—北京—南京—蘇州—上海—広州を巡った際の旅行記である。北京で廖承志、西園寺公一らに面会したほか、人民公社、鉄鋼コンビナート、小学校などを見学する定番コースであった。「大地に立つ——四千年の歴史のあとに」「百聞は一見に如かず——その見たまま、感じたまま」「明日を探る」の見出しの下に、訪中時の見聞や感想が記され、著者による旅先のスケッチも所々にはさまれる。著者の観察は、蠅やネズミがいない、忘れ物がもれなく届けられる、泥棒がいないなど、革命後の大きな社会変化に賛嘆する、この時期の訪中団に特徴的な紋切り型の観察である。「解放」後の中国社会の安定、民生の向上、衛生の改善、経済の発展、教育の普及などが肯定的に紹介され、最後に日中の友好増進と早期の国交回復が説かれる。

(村田雄二郎)

#### 新中国視察報告書：1966／日本乾電池工業会編

東京 日本乾電池工業会 1966 112頁 [Q2040]

中国最近の乾電池の生産事情およびその需要背景を知るために組織された乾電池及び関連企業の代表13名からなる視察団の記録。団長は日本乾電池工業会会長の藤室益三（東洋乾電池取締役社長）。日程は4月11日に羽田を発ち、香港—広州—上海—南京—天津—北京—広州を経て、4月25日に帰国した。滞在は短期だったものの「従来全く知られていなかった中国における乾電池工業の概要」を明らかにした点は「決して小さな収穫ではなかった」と自賛しており、

その報告である「中国における乾電池事情」は専門的な内容もふくめ簡潔にまとめられている。参加者による「中国の化学肥料工場見学記」「新中国北京電池廠參觀感想」なども興味深い。団長の「諸設備や、その技術そのものが、あまり感心するものではなかったが〔中略〕従業員達の真剣さには大いに打たれるものがあった」との感想は、中国の産業事情の核心をついているように思われる。何よりも面白いのは口絵で収められている「中華人民共和国製乾電池」一覧表で、今では失われてしまったであろう、全国の各地の乾電池の図柄を色刷りで見ることができる。

(関智英)

**私の中国旅行：革命・自衛・再建・自力更生の中国／山口清一著**

**大阪 現代理論社 1966 12, 193 頁 [15641]**

和歌山県新宮教会長老も務めた山口清一が、山崎利雄団長ら総勢 20 名で構成された日中友好協会旅行団（第 3 回 203 団、1965 年 4 月 27 日出発）に参加した際の旅行記である。香港―広州―北京―南京―蘇州―上海―杭州―広州とまわって帰路についている。北京では、周恩来首相、南漢宸中国国際貿易促進委員主席、楚凶南中国人民対外文化協会会長ら以外にも、趙安博・楊温玉・勇龍貴らと会談している。著者は中国の専門家ではなく、一人の日本人の視点から当時の中国をあるがままに記述している。

(中村元哉)

**1967**

**中国の旅から／小山一平著**

**長野 長野県中国研究会 1967 232 頁 [Q2034]**

中国人民外交協会の招きで、日本地方自治代表団の一員として訪中した際の記録。著者は当時、長野県上田市市長。旅程は 1965 年 4 月 28 日より 6 月 3 日まで、北京―ハルビン―長春―瀋陽―撫順―武漢―南京―蘇州―上海―杭州―広州―仏山を歴訪するものであった。北京では人民大会堂で開かれたメーデーの前夜祭に参列し、周恩来総理の茶会に招かれた。このとき同席した日本人の中には、滝沢修を団長とする新劇関係者や大松博文率いるバレー選手団などの顔もあった。人民大会堂では郭沫若とも懇談している。著者は社会主義中国に対して、物質的・消費的欲望を是認する日本社会と「全く異なった思想、倫理によって、新しい経済、社会機構の国家と個人生活を創造しようとしている」、「幼少の頃から徹底的に行われている政治思想教育は、それを可能にするための人間づくりの教育である」、「毛沢東主席と中国共産党の指導にたいする全面的信頼のもとに、六億五千万が一致団結して国家建設に邁進している姿は、驚くべきものがあり、社会主義建設は成功裡にすすめられて、着々と、強大にしてゆるぎなき国家が築かれつつある」と肯定的な眼差しを向けている。

(村田雄二郎)

**文化大革命下の上海、南京において：華中方面視察報告／高碕事務所編**

**出版地不明 高碕事務所 1967 41 頁 [Q2045]**

高碕（達之助）事務所が 1967 年 4 月 10 日から 8 日間、北京駐在連絡事務所の野口一郎、内田禎夫、東京本部の宗像善俊、須田生三の 4 名を華中に視察させた際の出張報告書である。彼



ら4名の目的は、文化大革命下での南京・蘇州・上海の工場施設や人民公社の現状を視察し、あわせて1967年初頭に上海で発生した文化大革命の動向を分析することだった。この報告書には、学術研究にとって興味深い記述が散見される。その一例を抜粋すると、次のとおりである。

「造反派や紅衛兵との会話を通じて、今回の文化〔大〕革命に関し、その主観的に追求する目標＝理想が現実に生じた大きな混乱と犠牲の代価を支払ってもなお価値あると考えられる程度に本当に実現可能なかどうか、といった点には依然として大きな疑問が残る。そして、人心の末端に至るまで極端な形で浸透しつつある毛沢東主席に対する個人崇拜については、問題があるのではなかろうか」、「今日の日本のラジオ工場などに比べると、技術的に相当遅れていることは明らかだが、賃金コストの低さから考えれば、労働集約的技術は十分にその基盤をもっているわけであり、これでもう少し能率が上がってくれば、確かに東南アジア等への輸出市場では日本製品の脅威になるかも知れない」。

(中村元哉)

## 1968

中国から帰って／岡崎嘉平太〔述〕

東京 国民政治研究会 1968 51頁 [Q2046]

日中総合貿易連絡協議会会長の岡崎嘉平太が1968年2月1日から3月9日まで北京を訪問した際の記録である。日本側の参加者は古井喜実(団長)・岡崎嘉平太・田川誠一、中国側の参加者は劉希文・王曉雲・孫平化であり、LT貿易からMT貿易へと切り替わる際の日中間の交渉過程の一端が記されている。この記録が興味深いのは、「文化大革命は収拾の段階にある」との認識が示されていることである。現在の文革研究も1967年から1968年にかけて一旦収束に向かいつつあったと評価していることから、この点に限定していえば、妥当な中国認識が示されていると言えよう。なお、26頁以降は、対話形式となっている。

(中村元哉)

## 1970

中国見たまゝきいたまゝ／内藤誉三郎著

出版地不明 出版者不明 出版年不明 48頁 [Q2036]

著者は1970年3月、古井喜実・田川誠一らの日中覚書貿易代表団に加わり北京を訪問した。団長松村謙三(松村は5度目の訪中)に随行するかたちでの初めての訪中であった。帰国後、著者が『読売新聞』『毎日新聞』に掲載した文章をまとめたのが本書である。「中国見たまゝ」「中国の教育を見て」のほか、「周総理と松村訪中団との会見における周総理発言要旨メモ」「日本側の周総理会談メモに対する中国側の訂正意見」を収める。著者の当時の肩書は、参議院文教委員会委員、自民党文教制度調査会副会長、自民党神奈川県連顧問、大妻女子大学学長。文革期中国に対する著者の観察・印象は概して好意的で肯定的なものである。曰く「服装は質素ではあるが、洗たくがよくゆきとどいて、小ざっぱりしている。自分さえよければ他人にはどんな迷惑をかけても構わない、人を押しつけても自分だけは出世したい、金持ちになりたい、楽をしたいという、いわゆるマイホーム・エゴイズムの風潮は影をひそめている」(9頁)。

(村田雄二郎)

水野・山下訪中報告／水野清，山下徳夫〔述〕

出版地不明 アジア国会議員連合 出版年不明 25頁〔Q2048〕

衆議院議員水野清と同議員山下徳夫の訪中記録である。日本側の団長は川崎秀二，中国側の参加者は王曉雲・呉曙東・許宗茂と通訳の関氏（女性）であり，訪中期間中に周恩来総理，王国権らとも意見交換している様子が分かる。文中に「昨年（1969年）の佐藤・ニクソン会談後の共同声明」，「韓国と台湾を昔のように植民地化して自分達の勢力範囲に引込もうとしている」とあることから，この訪中は1970年，出版された年も1970年と推測される。主要な話題は，日本の軍国主義復活の可能性，中国の賠償請求の可能性などについてであった。興味深いのは，周恩来総理が「蒋介石の悪口を言わな」かったことに対して，「今迄と比較して変化であります」と記していることである。なお，「ニクソンがやって来ることを末端にも徹底して説明しているようでした」と記されている点は，やや不可解である。

（中村元哉）

1971

新しい中国：写真集／「新しい中国」編集委員会編

東京 総評資料頒布会 1971 472頁〔Q2054〕

前半は当時の中国の様子を伝える写真（主に白黒）で，これが全体の約85%を占める。総評（日本労働組合総評議会）の刊行物ということもあり，田英夫ら社会党・公明党関係者の交流の写真が複数掲載されている。前総評事務局長で日中国交回復国民会議事務総長の岩井章による「発刊のごあいさつ」によれば，本写真集は「過去の歴史を知り，未来に備えるという願いを込めた労作」とされるが，過去の歴史に関する写真はあまりなく，主要年表の範囲も1971年1月から10月と限定されている。いずれの写真も中国が外に見せたかったであろう側面を切り取り，写真によっては毛沢東語録の一節がキャプションに付されている。ただ操車場の写真（198頁）に写り込んだ客車の側面には何らかの標語が書かれ，車両がかなり傷んでいることがわかる。巻末「資料編」には中国の政治機構や承認国一覧，各種声明文に続き，「私の見た中国」と題して岩井章・市川雄一（公明党機関紙局長）など6名のエッセイ，330ほどの友好商社の一覧表（社名・所在地・電話番号）が掲載されている。

（関智英）

下定決心不怕牺牲：第六次訪中学生友好参観団七〇年夏訪中報告集／第六次訪中学生友好参観団訪中報告書編集委員会編

東京 斉了会：第六次訪中学生友好参観団 1971 111頁〔Q57〕

斉了会（ちいらかい）とは，1965年から始まった訪中学生友好参観団の別称で，1972年の第8回まで毎年組織された。訪中した団員は総計800名に上る。会の名称は，通訳の発する「集まりましたか（斉了嗎？）」が団員の記憶に強く残ったことに由来する。本書は，1970年8月7日から8月30日まで訪中した第6回訪中学生友好参観団の記録である。編集委員会代表は若林正文。書名の「決意を固め，犠牲を恐れず」は，文化大革命の当時広く唱えられた毛沢東語録の一つで，「万難を排して勝利をつかみ取る（排除万難，去争取勝利）」と続く。参観団の訪問地は，広州—長沙—韶山—萍鄉—寧崗—井崗山—吉安—南昌—上海—北京というように，中

国革命の足跡をたどる旅であった。また、北京では首都紅衛兵の歓迎を受けて、人民公社を見学し、清華大学では革命委員・学生・労働者と座談会を開き、さらに夜は「革命的現代京劇」を見るなど、プロレタリア文化大革命を実地に体験する記録集となっている。学生の見聞記の中には、中国で進められていた「教育革命」を日本の学生運動のあり方と結びつけて理解するような記述も見られる。革命による社会の大きな変化に対する賛辞や社会主義への共鳴をかくさぬ字句も、随所にあられる。「ホテルでも鍵をかける必要がなく、落とし物をしてもし必ず届けてくれるし、役人風を吹かす人もなく、社会主義国だから企業間の過酷な競争や、不当表示、着色剤などを用いる商品もない。嘘とか生存競争といった言葉はおよそこの国には相応しくない。また礼儀などもすべてに四角張らず、簡素に、心をこめて行うのが今の中国である」(5～6頁)。資料編には、広州で面会した郭沫若の談話、および北京で面会した徐明の談話を収録する。

なお、斉了会の歴史に関しては、関係者の回想など綴った『斉了会の50年 訪中学生友好参観団の軌跡 1965年～2015年』(斉了会編, 2015年)がある。

(村田雄二郎)

## 1972

中国のバカ：日本のバカ／葛西純一著

東京 太陽社 1972 264頁 [Q1848]

奥付によれば、著者は1922年に宮城県子牛田町に生まれ、1940年に満鉄社員、43年に関東軍兵士になったという。1945年に八路軍(後の人民解放軍)に入って助理軍医と通訳を務め、1953年に帰国した。文中から察するに、林彪率いる第四野戦軍に属していたようだ。「中国には「定価」(原則)と「交渉」(人間関係)の間には「幅」があって、その幅は日本よりはるかに大である」「要は、中国には「裏」と「表」があり、日本のように「表」だけではない」(112頁)という著者は、中国の「裏」を事情通よろしく、個人の体験談やエピソードを交えて、かなり露悪的に語る。下ネタ話も頻出し、辞書にはない中国人の罵り言葉をこれでもかと列挙する筆調からは、日中友好人士に冷水を浴びせたいとの著者の狙いが垣間見える。短編のエッセイのほかに、「未帰還者」と題する自伝的小説、また「中共軍従軍句集」があり、とくに後者は一定の資料的価値がある。さらに付録として「中国語学校一覧表」、「中国関係団体」、「満蒙関係団体名簿」(「満蒙同胞援護会資料に基づく」)を収める。

(村田雄二郎)

北京日記／嶋倉民生著

東京 日本経済新聞社 1972 319頁 [Q1996]

著者は1969年から1972年まで日中覚書貿易事務所の所員として北京に滞在した。主に滞在中の日常、毛沢東、周恩来など指導者に関する散文、社会主義建設に関する見聞、MT貿易業務に関わる話題からなる。人民公社の視察を通じて中国の優れた点として生産隊ごとに保健担当者がある医療制度を挙げ、古井喜実の希望で人民解放軍を視察した際には食糧などの自給率の高さが印象深かったとしている。清華大学や五・七幹部学校など社会主義の現状を視察するほか、北京の大柵欄街地下壕も見学した。全長2キロ、最高深度8メートル、通風管、照明、電話、有線放送、WC、食糧倉庫、炊事場、休憩室、会議室があり、有事の際には1万人が宿泊で

きるという。仕事の面では自身の造語で「MT 四原則」なるものを掲げている。第一は「運動の原則」で貿易によって日中友好を拡大すること、第二は「ノンポリの原則」で日中友好の目標の障害物（具体的には中国敵視政策）を除去すること、第三は「社会主義理解の原則」、第四は「中国指向の原則」で脱亜入欧論的な人物には中国を本当には理解できないとするものである。言論の自由や社会制度の違いについて議論したり、家永教科書裁判の話題から日本における司法権の独立について説明して理解を得られなかったりと、中国人と率直に対話する機会もあった。地下壕を掘っている現場を不用意に撮影して群衆に囲まれたり、壁の毛語録スローガンが塗り潰されたりしているのを見て文革の下火を実感するなど、時勢を肌で感じとった記述も多い。

(池田尚広)

#### 杏の街かどから：中国の主婦として二十九年／佐々木ハル子著

東京 光風社書店 1972 231頁 [Q1991]

著者は岩手県気仙郡世田米町の出身で、1942年チチハルにわたり、満鉄病院に務めた看護婦である。敗戦後は中国に残留し、戦後の混乱の中でチチハル、長春、そして天津へと移り、都合29年間中国に居住して1971年に帰国した。本書はその半生の回想記である。チチハルではソ連兵の略奪、長春では国共内戦を経験した著者は、中華人民共和国成立後、天津市立工人医院に勤務しつつ、中国人の夫との間にもうけた一人娘を育てた。集団化時代の中国を留用日本人として生き抜いたエピソードの数々が淡々と綴られる。66年の毛沢東の長江遊泳を機に天津で水泳がブームになったこと、71年のシアヌーク訪問の際に女性のスカートが復活したことなど、日常を淡々と記す筆致は時代の証言として一定の価値がある。生活必需品の値段や配給品の量も細かに記され、社会主義時代の労働者の家計の状況がよくわかる。

(村田雄二郎)

#### 未来を開く新中国／渋谷昇次著

東京 R出版 1972(再版) 226頁 [8893]

日本漁業組合副会長を経て、1946年に社会党から出馬して衆議院議員を1期、1963年からは静岡県大井川町長を5期つとめた著者による「新中国」の紹介。二度の訪中(1956年と1971年)をもとに執筆されてはいるが、どこまでが実際の見聞に基づくかは不明瞭。一度目の訪中は1956年で、河野一郎らと日ソ漁業条約締結のためソ連を訪問した後、日本平和委員会代表団の一員として北京入りし、1か月をかけて中国各地を視察した。この時は東北部や西北部を巡ったようで、鞍山市の鉞山、ハルビンのボイラー工場、大連港、柴達木(ツアイダム)油田、韶山の灌漑排水事業など、各地の国家建設事業の躍進ぶり、人々の生活の向上の様子が、日本占領時代の悲惨な状況と対比されながら紹介される。二度目の訪中は1971年秋で、広州や上海で、病院や託児所を視察している。著者は、人民公社や国営企業による集団体制は、合理的かつ生活を飛躍的に改善するシステムで、「飢餓、貧困、病気、失業というみじめな情景は、今はまったくなくなった」と、中国の社会制度を理想的であるとみなす。だが、興味・関心の対象は、中国の社会主義制度による革新的な開発事業あるいは制度改革にあったと見られる。1941年に訪れたという「満洲国」については、「どこへ行っても異臭がし、ゴミでいっぱいだった。列車に乗っても臭くて、中国人と一緒に乗ることは困難だった」と回顧している。

著者は戦前、パラオに本社を置く南興水産の嘱託として調査部を担当し、興南協会参事等を兼任していた。『南太平洋諸島：地政治史的研究』（先生書店、1943年）という著書もある。戦後、漁業組合や革新政治に情熱を傾けた経緯は不明だが、町長時代の渋谷は地元大井川町営港の建設工事に力を注ぎ、半農半漁の貧しい町に一躍近代的な港を建設した手腕は町民の間に広く評価された。が、その権力の大きさゆえに、建設工事をめぐる汚職で逮捕されている（『読売新聞』夕刊1976年9月14日、2頁）。

（辻直美）

### 新しい中国／菅沼不二男，飯島篤著

大阪 保育社 1972 153頁 [Q2023]

直近2,3年に訪中した友人から集めた写真をもとに当時の中国各地の特徴を記す。名所旧跡に関するごく一般的な記述も多いが、市民の生活に根付く時代の特徴を捉えたところも少なくない。北京駅は母子専用の待合室や映写設備をもつ小待合室など設備が充実。交通の要路であった西単にはトロリーバスが行き交い朝夕には夥しい自転車の流れが出現。路傍では人民公社から来た安くて新鮮な果物が並ぶ。天津の塘沽新港には日本からの貨客船、北欧からの船がみられ国際色豊かである。上海の蘇州河以南の市街地にある瑞金劇場には大きな毛沢東の肖像が掲げられており、本文中では、映画・演劇は単なる娯楽ではなく「延安文芸座談会での講話」に示されたように社会主義建設推進の上で文化戦線の一端を担う重要な地位を占めている、と説明される。託児所は毎日連れ帰る日託と月曜から土曜まで預ける週託があり、託児費は月額10元（1400円）以内。広州市内を貫流していた珠江の江岸にはアパートが立ち並び、かつての水上生活者の姿はもはやみられない。巻末は北京周辺、上海周辺、地方都市、革命の史跡に分けて16都市を紹介しているほか、「工場と人民公社と文化」と題して文化大革命、工農一体の生産体制、大慶油田、文芸路線などについて概説している。「相互の理解と友好のために」と題した文章では、国交正常化を果たし自由な人的往来が活発化するであろうことを見越して、訪中にあたっては社会体制の違い、歴史の再認識、中国人民の毛沢東への敬愛、中国人民の生活水準について注意すべきだと述べている。

（池田尚広）

### 中国見たまま／杉森久英著

東京 文芸春秋 1972 240頁 [Q2016]

著者は出版社勤務を経て文筆業に入った作家で、同業の武田泰淳・永井路子・尾崎秀樹および日中文化交流協会の木村菊雄〔菊男〕と1967年4～5月に中国を巡った際の旅行記である。武田泰淳はこのときの訪中経験をもとに、『揚子江のほとり 中国とその人間学』（芳賀書店1967年）を著しているが、本書は訪中から4年を経て、『諸君』連載の所論を一書にまとめたものである。一行の訪問地は、広州—長沙—北京—西安—上海—杭州—紹興。北京では許広平、趙安博・郭沫若らと会見し、また上海では作家協会の杜宣らと会談した。

著者は画一的な革命宣伝の空疎さに辟易し、経済や技術の遅れと停滞、極度に政治化した文学芸術のつまらなさに対して、忌憚のない批判を繰り返している。珍しい外国の賓客を取り囲む野次馬の群衆に対しても、著者は何度もつきはなした見方をしている。「そのしまりのない口もとや、無気力な目つきは、そのままこの人たちの精神内容の空虚を物語っているとしか思えない。中華人民共和国の人たちは、機会のあるごとに、革命によって中国人民は過去の悲惨

な状態から救われ、前途に希望を見出して、建設にいそしんでいるというけれど、それはごく一部で、何億という人口の大部分は、まだ新政の恩恵に浴していないのではないかとしか思えない。」（179-180 頁）

（村田雄二郎）

### 素顔の中国／聖教新聞社編

東京 聖教新聞社 1972 226 頁 [Q1979]

岩村三千夫・西村忠郎・高田富佐雄・菅栄一・山田礼三・野村浩一・宮川寅雄・藤堂明保・香坂順一・山口一郎・新井宝雄がそれぞれ中国について書いている。『聖教新聞』1971年1月から12月まで連載されたものが書籍化された。高田富佐雄は1964年4月、松村謙三の第三次訪中に同行した。四川省の新民人民公社で現地の基本的な事柄を聴取する一方、かつては地主の所有物であった豪華な紫檀の寝台で寝る人民公社社長の姿は「革命がもたらす人間の変化を、痛烈に印象づけるとりあわせであった」。翌1965年にはかつて学んだ同文書院のあった上海を訪れ、中国人街半淞園の変化を目の当たりにした。菅栄一は1964年9月から1966年10月まで北京に滞在した。第一印象は「伝えられるよりも、はるかに物が出回っている」ことで、特に食糧事情に杞憂がないことを述べる。滞在中はよく民衆のデモ行進や集会を目にしたが、総じて規律正しく整然と行われていると感想を述べ、「文化大革命のなかで紅衛兵が登場したのも、このような大衆運動でつちかわれた基盤があったからだ、いえるのでは」としている。宮川寅雄・野村浩一は1971年6月、日本文化界訪中団で白石凡・藤堂明保・尾崎秀樹らと訪中した。周恩来と会見し、郭沫若の案内で故宫博物院を見学したほか、大学や中学校などの教育現場や「崇文区五・七幹部学校」を訪問している。宮川は北京大学の視察において、哲学系の研究対象に「実験論、生産力論、人生論の三つの毒草に対する批判」があることに注目し「現代修正主義に対する闘争という政治的要求に結びついたもので、当然、中国人民の世界観の変革に役立つものであろう」と肯定的な感想を述べている。同年10月に訪中した香坂順一は、広州の中山大学で針麻酔による甲状腺腫瘍と腎盂結石の手術を見学した。ここに毛沢東が提唱した「古為今用、洋為中用」を見るとともに、この姿勢が現代京劇、現代バレエにも表現されているとの感想を記す。また1966, 67年にも訪中した経験から、文革前後の変革の軸となっているものは「階級観点の徹底的な確立である」と述べている。

（池田尚広）

### 松村謙三と中国 / 田川誠一

東京 読売新聞社 1972 246 頁 [Q1567]

本書は、日中国交正常化に取り組んだ政治家・松村謙三の評伝であり、詳細な松村の訪中記録を収める。著者の田川誠一は、松村の秘書を経て衆議院議員となり、松村同様、日中国交正常化に取り組んだことで知られる。そのため本書には、国交正常化前の田川自身の訪中や、1971年に松村の葬儀参列のため王国権が来日した時の様子（いわゆる王国権旋風）についての記述もあり、興味深い。

（吉見崇）

### 写真集・中国の大地を行く／名古屋テレビ報道部

東京 青年書館 1972 151 頁 [Q2005]

名古屋テレビ報道部『僕らと隣あう8億の友だち』の姉妹編で、同報道部6人による共同構成。写真の多くは万里の長城・天安門などポピュラーな中国紹介の写真だが、一部にカラー写真があり貴重である。故宮暢音閣、天安門、前門、人民大会堂、新華門、北京飯店、頤和園仏香閣から臨む昆明湖、定陵、自転車置き場、自動車「上海号」、燎原日夜百貨店、列車員（深圳～広州）、中国出国商品交易会、葵芸工場、ハリ麻酔手術、韶山広場、八路軍辦事処（西安）、紅旗広場（瀋陽）、大寨、上海（市内、上海大廈からの鳥瞰、外灘遠景、魯迅紀念館、魯迅旧居、578連隊第2中隊、587連隊半自動小銃訓練、196師団戦車連隊、中国製59式戦車など）。白黒写真の「軍民憶苦会」「政治学習（『矛盾論』を読む小学校5年生）」なども興味深いものである。

（関智英）

### 僕らと隣あう8億の友だち：世界の焦点・新生中国のすべて／名古屋テレビ報道部

東京 青年書館 1972 190頁 [Q2004]

名古屋テレビ報道部の7名による共同執筆。詳細な時期は不明だが1971年から72年にかけて中国各地を取材した際の記事77篇と座談会「日本人が遠くしている中国」を収める。取材班の訪問地は北から撫順—瀋陽—鞍山—大石橋—北京—武清—太原—大寨—西安—延安—上海—杭州—長沙—韶山—広州—新開（ママ、新会の誤記か）。各記事はいずれも見開き2頁で完結しており、「文盲の帽子を脱ぐ」「文化大革命と子どもたち」「織機のボルトをつくる小学生」「人民解放軍—百発百中、闇夜の鉄砲」「必需品は安く、ぜいたく品は高く」「昼間にビールをのむ話」「下戸のヨッパライ」「人民の「いい湯」」といった記事を収める。「日本軍国主義」とは植民地型収奪機構」「日本人のひとりひとりが中国人を虐殺した」といった記事の表題からもわかるように、日本の侵略を反省し、中国の発展を賞賛する立場をもとに執筆されている。姉妹編として『写真集・中国の大地を行く』がある。

（関智英）

### ぼくの北京留学：バレエと文革と青春／林道紀著

東京 講談社 1972 204頁 [Q1634]

著者は1965年11月から1969年9月まで北京芭蕾舞学校でバレエを学んだ。父親は友好商社である日本景徳鎮株式会社の代表、父方の祖父は林弘吉、母方の祖父は画家陳包一である。入学後まもなく文化大革命が始まる。当初は外国人であるため蚊帳の外に置かれるが「紅色娘子軍」「白毛女」は、民族的で革命的なバレエだ。これからも創作されると思う」「ぼくも同学、中国人といっしょに文化大革命を闘いぬこうと、一人で決心している」というように文革が芸術活動に与えた影響の中で感化される著者の感想が印象的である。革命運動への参加が許されると、周口店で学校の集団下放を2週間経験したり、紅衛兵とともに毛沢東、周恩来の接見にも参加したりするなど、自らが「革命師生」になった自覚と感動を述べている。学校内は井崗山公社派と毛沢東主義陣線派に分かれ、著者は前者に属す。両派が一時統一されると直後のバレエ公演「白毛女」では悪役の家丁を演じた。上海にある祖父母の墓がブルジョアに属すとして破壊されたことに不満を持ったこともあるが、著者は基本的に一貫して革命運動を中心とする中国の現状に賛同しながら勉学と稽古に励み、1969年3月に卒業してからも帰国を半年遅らせた。1971年に松山バレエ団の訪中公演の一員として再度訪中。広州、北京で公演を行

い、延安も訪れた。公演は周恩来・郭沫若・廖承志・王国権も観劇した。断片的ではあるが留学中は西園寺公一に会ったことにも触れている。

(池田尚広)

**document 中国：三留理男・写真報告／三留理男著：粟津潔，神戸明編  
東京 主婦と生活社 1972 288頁 [Q2022]**

著者の最初の訪中は日中文化交流協会代表団に加わった1971年9月。2度目は1972年から6月末から8月まで単身で訪中した。広州—北京—西安—延安—上海—南京のほか東北各地の工業地帯，革命の地井崗山一帯，各地の人民公社を取材した。取材目的は「一つには文革後の新しい中国にふれること，特に中国の人びとが何を考えているかを知ることであり，第二には東北地方における日本侵略軍の爪あとを，自分の目でたどること」である。軍事訓練に励む10代の民兵や延安の農村で出会った清華大学の学生，溶接工場の女工といった若い力。高層ビルが立ち並ぶ北京，上海やトロリーバスに自転車の群れ。市場や団地，住宅地に映る人民の衣食住。こういった生活風景も去ることながら，病院の脳外科手術まで見学しているのが珍しい。東北は工場の写真が中心だが，一部に女性労働者に焦点をあてているところがある。瀋陽の変圧器工場は労働者5,050名のうち女性が1,200名おり，別の鉄鋼工場の女性労働者(19歳)は夜になると革命劇「紅灯記」のヒロインを演じるという。他にも体育学校の授業，「白毛女」「紅色娘子軍」などの革命劇，美術工芸品の生産現場，少年宮や学校の青少年，人民公社の農業，生活，医療などの中にも目を引く写真が少なくない。

(池田尚広)

## 1976

**日本科学技術訪中代表団工場・公社等参観記録：1976.6.8～6.29／日中経済協会編  
出版地不明 日中経済協会 1976 59頁 [10944]**

近藤次郎(東京大学工学部長)ほか各界の専門家9名で構成された日本科学技術訪中代表団が，1976年6月8日から6月29日まで，中国の工場や人民公社などを視察した。本書はその参観記録の一部を抜粋したものであり，通産省通商政策局北アジア課の「中国経済関係調査」の参考資料として作成されたものでもある。項目は「工業関係」「農業関係」「教育関係」に分けられ，各項目の主要な機関の歴史と現状がコンパクトに紹介されている。とりわけ，1949年前後の状況を記す記述が興味深い。たとえば，「教育関係」の清華大学の欄には次のような記述がある。「(中略)解放前の大学は英米の教育制度をとっていたが，劉少奇はソ連の制度をそのままとり入れたのである。1953年以前，制度，教材，試験科目等は英米のものであったが，53年に新しく採用したものは，教材，試験制度，教育計画等すべてソ連そのままのものであった。だが，その本質は以前のものと同じであった。それは，プロレタリアの政治から離れ，工農兵大衆から離れ，実際の生産労働から離れた，三離脱の教育制度であった。(中略)〔劉少奇は〕プロレタリアの政治抜きで，専門知識だけを追求し，学生をブルジョアの方向へもってゆこうとしたのである。(中略)理科知識を身につけさえすればよいとの考えをひろめ，国家の前途，世界革命の命運に無関心にさせ，政治から離れさせ，工農兵大衆から離れさせ，ブルジョア的権利を拡大させた」。

(中村元哉)



1977

**楊柳芽ぐむ中国の春／数原貢著**

**東京 学游書房 1977 288頁 [11768]**

著者は1976年に訪中した日中農交友好訪中団26名の副団長、静岡県信用農協連専務理事。同年3月15日から30日まで上海—南京—揚州—西安—大寨—北京を訪問した際の記録である。訪中団の目的は友好交流であり調査が主ではないとしながら、各地で郭莊ダム、江都水利工程管理区などの水利施設、上海の馬陸人民公社、西安の魚化寨人民公社、昔陽県の大寨人民公社などを訪問した際の見聞を仔細にメモしている。その内容は農業生産と規模、農業用機械、作物と作付け、農業生産による所得配分、農家の税負担や個人の生活、住宅事情などを含む。社会主義についての一般的な事柄にも関心を持っていた著者は「農業生産に関しては、確かに、私有と自由をめぐるものは社会主義である。しかし生活についてのものは、食糧、住宅あるいは電気水道の施設などは社会主義的な取り扱いの中でこなされている。社会主義、社会主義と言っているにもなるほどそうかと注意を引くものは少ない」としている。農業の現場以外では、上海の紡績工場、揚州の漆器工場、昔陽県の農機具工場などを視察したほか、北京の清華大学、南京の魯迅中学などで教育事情も視察した。鍼麻酔や医療保険の事情などにも関心を寄せている。

(池田尚広)

**見てきた中国：小記者レポート／日中友好小記者訪中団編**

**東京 日中友好小記者交歓会 1977 144頁 [10271]**

小中高生からなる「小記者」訪中団の記録。学校新聞研究会で活動する教師らの要望で組織され、団長は当時東京都渋谷区立松濤中学校長の鈴木英男が務めた。主要部分の小記者が記す行程紹介や手書きの新聞、感想文で構成される。訪中団は1976年3月に第1次(21名/うち小記者14名)、77年3月に第2次(21名/同小記者15名)が派遣され、訪問順は異なるものの、北京・西安・南京・揚州・上海を巡り、名所旧跡や博物館、中学校や聾学校、人民公社、工場などを参観した。小記者らは、中国側の熱烈な歓迎に友好の情を高め、人民奉仕・男女平等・理論と実践・自力更生といった政治スローガンも素直に受け入れ肯定していく。今日から見れば、小記者らはあくまで友好の舞台に「上せられた」存在だった。1次と2次の間に、中国では毛沢東の死、四人組失脚という大きな政治変動があった。2次訪中団は四人組をさんざんに批判する劇や漫画展に案内される一方で、知識青年下放の精神を聞き、紅衛兵や紅少兵と交流している。結果的に中国社会の大きな変化を目にした小記者であった。

(辻直美)

**日中友好大学教員友好訪中団文集（日中学術懇談会派遣）**

**出版地・出版者・出版年不明 28頁 [14585]**

日中友好協会（正統）と日中学術懇談会が共同派遣した「日中友好大学教員友好訪中団」に参加した団員らによる文集。訪中団は、中国からの留学生を受け入れている大学を主とした15大学の教員23人によって構成され、1977年3月18日から4月1日までの約2週間、上海—鄭州—西安—延安—北京の各地を回り、大学・人民公社・名勝旧跡・博物館・劇場等の文化施設

を訪問したほか、中日友好協会会長の廖承志や日本に留学経験を持つ学生との交流を行った。文集の前半には廖承志による代表団に対する講話内容が掲載され、廖は、当面の国際情勢について、「中国は二つの超大国に反対するが、とりわけソ連の帝国主義に反対する」、国内情勢については「四人組粉砕後、華国鋒体制のもとで四つの現代化実現を目指す」という方針を語っている。後半には、訪中団に参加した池田温・緒方一男・川勝義雄・清水茂・山根幸夫・依田憲家・針生誠吉・山口和子の訪中記が掲載される。廖の講話が政治色濃厚であるのに対して、中国の文物、教育、歴史観、文学など、日本側団員の興味・関心は各人各様である。巻末に、参観日程と団員名簿を付す。

(辻直美)

## 1978

### 新生中国に招かれて／小串靖夫著

東京 家の光出版サービス 1978 167, 28 頁 [11985]

1977年7月下旬、全国農協による訪中団一行8名が、中国農学会の招請で中国を2週間にわたり訪問した際の記録。訪問地は北京—上海—広州—桂林。北京では紅星人民公社、人民日報社、遺伝研究所を視察したほか、農業に関する座談会に参加した。座談会で説明にあたったのは、農業局副局長の張琪瑞、農学会副理事長の沈其益で、中国農業の生産状況、中国農業の路線・政策・方針、「農業は大寨に学ぶ」、中国農業の前途などについて説明された。要人では中日友好協会会長廖承志、全人代常務副委員長の譚震林などと会見した。反覇権条項をめぐる日中平和友好条約の調印、全国の農業の状況と発展などについて主に記録されている。上海では上海師範大学、普陀区少年宮を見学し、上海市農業科学院などを視察した。広州では郊外の羅崗人民公社のほか、かつて毛沢東が所長を務めた農民運動講習所を視察している。中国滞在中に訪問したいずれの場所でも現地で聴取した概要説明と併せて日本側の質問が記録されている。また視察した二つの人民公社に他の資料を併せた「人民公社の収支と農民の所得」も収録される。

(池田尚広)

## 1979

### 中国考古見聞／関西文物保護青年職員友好訪中団編

京都 関西文物保護青年職員友好訪中団 1979 90, 13 頁 [10910]

1978年7月5日から7月21日まで北京—安陽—洛陽—西安—広州などを訪問した関西文物保護青年職員友好訪中団一行26名の記録である。団長は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第一室長の町田章。関西2府4県の教育委員会に所属する埋蔵文化財専門職員と研究機関職員を基本に組織され、中国国際旅行社への申請を通じて実施された。北京の頤和園、天壇公園、万里の長城、故宮博物院、安陽の殷墟、洛陽の漢魏洛陽城、西安の永泰公主墓、乾陵、大雁塔など各地の史跡や博物館を訪問した見聞を団員各氏が綴っている。文化財に限らず、北京市師範学院の視察報告や各地で見られた植物の一覧も含まれている。現地視察のほか国家文物局関係者との交流会も行われ、陳滋徳文物処処長、蔡学昌文物保護科学技術研究所副所長らとのやり取りでは、中国における文物保護の組織機構や専門家養成、人員不足、発掘における

人的配置といった日中で共通して課題となっている事柄について意見交換を行った。巻末には訪中団の詳細な旅程が付される。

(池田尚広)

#### 中国紀行：第二集／早稲田大学教員学生友好訪中団編

東京 早稲田大学教員学生友好訪中団 1979 83頁 [10978]

早稲田大学の教員と学生を中心に構成された訪中団の記録。同訪中団は1976年の早稲田大学中国研究青年友好訪中団を母体とし、1978年8月11～25日の約2週間、香港経由で深圳から入り、広州—鄭州—開封—洛陽を訪問した。滞在中、故宮・頤和園・万里の長城・明の十三陵・龍門石窟などの有名な史跡のほか、広州農民運動講習所跡、鄭州の紡織工場付属の幼稚園、洛陽のベアリング工場などを訪れ、現地の人々と交流している。詳細な旅行記録というよりは団員の体験談・感想文集に近い。史跡訪問や交流体験のほか、人々の日常生活に注目した文章も多い。例えば、北京の街路や書店・百貨店、洛陽の映画・芝居鑑賞の場で見られた光景などが取り上げられている。日本と中国の人々の生活様式やマナーの違いに驚きつつも、そうした両国間の相違を柔軟に受け入れ、相手国を理解しようとする姿勢が見て取れる。ちなみに訪中団の構成員は以下の通り。団長・杉本達夫（文学部助教授）、副団長・上野理（文学部教授）、秘書長・矢作武（教育学部講師）、秘書・教育学部講師2名、修士課程院生1名。団員：教員13名、博士課程院生1名、修士課程院生4名、学部4年生6名、学部3年生10名。

(久保茉莉子)

### 1980

#### 十億人の近代化／朝日新聞訪中記者団

東京 朝日新聞社 1980 248頁 [10881]

朝日新聞訪中記者団は1979年10月から11月にかけて、中国各地を訪問した。このとき訪問したのは当時の渡辺誠毅社長以下、政治・経済・外報などの様々な分野の記者9名。彼らを招待にしたのは人民日報社で、訪日への答礼の意味があった。本書の最後には渡辺社長が胡績偉人民日報総編集や鄧小平副首相と行った対談の内容が収録されている。

興味深いのは、訪問中記者が目撃した「上訪人」と呼ばれる人々の描写である。ここでいう「上訪人」は、文革終結後に名誉回復や復職を目指して北京の中南海に「善処」を求め陳情にやってきた人々のことで、当時は毎日5、6千人もの人々が訪れた。記者と面会した最高人民検察院政策研究室主任も問題解決の難しさを素直に認めるなど、当時の大きな社会問題として認知されていた。これについて同記者は「文革で負った深い傷跡が、ここでもいやされず、ぽっかり口をあけているといえそうだ」と感想を述べている。本書の特徴は記者たちが自ら目撃した文革を経て浮かび上がった中国国内の諸問題を淡々と描写する筆致だといえよう。

(山口早苗)

#### 巨象を撫でる：新中国・見たり聞いたり考えたり／大久光

東京 波書房 1980 280頁 [10906]

著者はかつて戦前に中国で学び、満洲国に滞在した経験があり、戦後松下幸之助の伝記を書いたことで知られる作家。代表的な著作に『松下幸之助一事一言』などがある。1979年に訪中

団の一員として中国を再訪し、北京や東北を訪れた。「あとがき」で著者が本書について、「ささやかな見聞を通してまとめあげた中国の印象記」であり、「群盲象を撫でると言うが、私の手も、その小さな一つだった。この巨大な対象を、それで捉えられたなどとは、とても思っていない。一旅行者の限られた見聞、印象から何かを読み取って戴ければ幸い」だと述べるように、訪中時に著者が感じた印象が記されている。参加した訪中団について名称などは示されないものの、参加者には「かつて青壮年の時代を中国大陸で過し、その土地や人間と浅からぬかかわりを持った人が少なかった」という。実際に満鉄社員や熱河で省公署に勤めていた人物などがいた。そうした訪中団の他のメンバーによる訪中の印象も本書には含まれている。

巻末には1979年の中国時刻表に基づき、著者が作成した「東北地方(旧満鉄当時の駅名付き)最新列車時刻表」という興味深い資料も付されている。

(山口早苗)

### カメラルポ 中国と民衆／大村哲也著

東京 木村経済研究所 1980 90頁 [10911]

著者は福島県いわき市出身で、法政大学を卒業後、いわき市議会議員を務めた人物。著者は本書刊行までに計4回訪中しており、本書は訪問中に撮りためた写真を掲載するカメラルポとして刊行された。4回の訪中はそれぞれ、日中農交労農活動家友好訪中団での訪問(1976年1月16日～29日、北京・大寨・南京・揚州・上海)、第一回いわき市各界友好訪中団での訪問(1977年1月11日～25日、北京・旅大〔旅順・大連〕・瀋陽・撫順・上海)、福島県民の翼友好訪中団での訪問(1978年8月22日～9月2日、北京・杭州・上海)、福島県下・議長会訪中団での訪問(1979年10月15日～28日、北京・鄭州・開封・邯鄲・洛陽)であった。本書にはこの4回の訪問中に撮影した中国の様々な地域の写真が収められており、当時の中国を知る資料としても有益だろう。

本書の狙いが「中国の庶民の生活を、私達同じ庶民の目で、ストレートに紹介しようということ」にあると言うように、著者が見た当時の中国の人々の姿が本書には映し出されている。例えば、公園で語り合う男女の姿、道端のプロマイド売り、床屋ではプロマイドを貼り出し「新式」の髪形を宣伝する様子などである。これ以外にも、文化大革命によって破壊された文化財の修復、復旧に当たる人々の姿、黄河周辺の山頂まで段々に耕された農地からは、文革後の社会の様子を垣間見ることができる。

(山口早苗)

### 同志！！僕に冷たいビールをくれ／草野大悟著

東京 講談社 1980 245頁 [10885]

著者は俳優で、映画『天平の甍』の撮影のため、上海—蘇州—揚州—大同一北京をめぐる。題名の「冷たいビール」とは、まずは文字通りの意味、すなわち中国で著者がしばしば注文した「氷啤酒」のことを表す。そしてもう一つ、この映画への出演が決まる以前、役者・夫・生活者として「枯れはてそうになっていた」著者の心が飲みたかった「冷たいビール」のことであり、映画の撮影を通してその「冷たいビール」を飲めたことへの感謝の思いが綴られている(244頁)。

初めて訪れた中国について、著者は「実にいろいろなものが入り乱れている国、新しい物を取り入れようとする一面と、数千年にわたって続いてきた習慣との落差が、正直に庶民の生活の

中に反映している」と捉えている。本書の中では、撮影時のエピソードだけでなく、著者が中国滞在中に体験したことが率直な感想とともに語られている。まっすぐな道をたくさんの人と自転車が行き交い、車が警笛を鳴らし合う様子、歩行者と自転車との間で小さな交通事故が起きた際に「罵街」と呼ばれる中国式のけんかが繰り広げられていたことなど、著者は中国の人々の日常生活を興味深く観察し、記録している。

著者だけでなく、俳優やスタッフたちが撮影の合間に街へ出て、片言の中国語をつかってレストランや売店で注文をしたり、観光地までの道を尋ねたりと、積極的に現地の人々と交流していた様子がわかる。そうした交流の中で、著者は日本に対する中国の人々の複雑な感情を知り、日本人がそれにどう向き合うかということも考えている。ちなみに同じく映画『天平の甕』に出演した俳優の中村嘉葎雄は、現地で自ら様々な風景や人々の様子を撮影しており、写真集『拝見中国大陸』（東洋文庫請求記号 10977）を刊行している。中村の説明によれば、中国ロケは2回実施され、1回目は1979年7～8月に上海、蘇州、大同、北京を、2回目は1979年11～12月に上海、西安・海南島・桂林をまわったという。

(久保茉莉子)

### 上海、杭州、紹興の旅／黄埔朋友会友好訪中団

東京 黄埔朋友会友好訪中団連絡所 1980 72頁 [10879]

黄埔朋友会友好訪中団は戦前上海に滞在した人々を中心に構成され、第一班から第七班まで男性69名、女性67名の計136名という大規模な訪中団であった。団長は日本経済協会の岡崎嘉平太が務め、編集後記によれば参加者の平均年齢は58歳であった。本書には人名・職業・住所などが記された詳細な「団員名簿」とともに詳細な日程表が付され、訪中団の全容・全行程を知ることができる（1979年9月19日～9月26日までの訪問）。

上海市内を巡った後に、杭州・紹興を訪れるコースで、上海市内では魯迅記念館・魯迅の墓を訪問した後、対外友好協会上海市分会が主催する「内山完造先生逝去20周年記念式典」に参加した。大規模な旅行団であったためか、新村（労働者住宅団地）、人民公社の参観では班ごとに異なる訪問先を見学したほか、4日目に第一班は上海工業展覽館、第二班は玉仏寺から豫園、第三班は黄埔港遊覧、第四班は上海紡績訪問、第五班は虹口巡り、第六・七班は自由行動、のように異なる訪問先が準備された。

興味深いのは、巻末に「黄埔朋友訪中会に参加して」というアンケートが付されている点である。旅程の改善点として多くの参加者が「自由時間が少ないこと」ことを挙げており、思い出の地である上海をもっと自分の足で歩きたい、というのが参加者の本音だったのかもしれない。また、本書には見返しのページに漫画家である出光永によるイラスト地図が付され、訪問先の位置が一目でわかるようになっている。

(山口早苗)

### 現代中国の農業／阪本楠彦編

東京 東京大学出版会 1980 298頁 [10902]

1979年6月21日から7月11日まで北京・成都・重慶・武漢・上海などを訪問した日中農交農業経済代表団一行10名の記録。団長は阪本楠彦東京大学農学部教授、秘書長は中島常雄東京農業大学農学部教授。中国社会科学院からの要請による訪中である。第I部は5つの人民公社と1つの水利施設での聞き取りの記録である。第II部は中国社会科学院副院長于光遠の講演、

農業経済研究所・北京農業大学・西南農学院・華中農学院の概要紹介と聞き取り内容である。第Ⅲ部では各団員が自身の研究内容に照らして視察結果をまとめており、報告のタイトルはそれぞれ次のとおりである。「人口政策の現状」（土屋圭造）、「労働点数制と経済原則」（大塚昭治）、「労働組織と分配について」（今村奈良臣）、「「農業区画」と機械化の諸問題」（七戸長生）、「価格政策と生産費」（梶井功）、「市場と青果物流通」（中島常雄）、「人民公社と集団経済」（照井信）。終章は、同年8月に阪本団長が「日中友好秋田県農業青年の翼」の顧問として訪中した際の記録をもとに大寨生産大隊について書かれている。巻末に付表「中国の度量衡」「農産物加工標準率」と代表団の旅程が収録されている。

(池田尚広)

### 中国経済の旅：壮大な実験に挑んだジレンマ／清水嘉健著

東京 情報センター出版局 1980 261頁 [10964]

著者は1938年に長野県に生まれ、1941年から1945年初めにかけて北京で過ごしたという経歴を持つ。1980年、読売新聞社の記者として約35年ぶりに中国を訪れることとなった。読売新聞社の企画「30歳の中国」という連載物の取材のため約1か月間中国に滞在し、北京—上海—南京—西安—鄭州—合肥などの各都市をめぐって当時の中国の実情を調査した。「社会主義の非効率的な面を大胆に捨て去る一方、資本主義のいい点を全面的に取り入れ（中略）壮大な経済実験に挑んでいる」中国の経済について、「思いのままにいささか偏見と独断もまじえて書きつらねた」（5頁）ものであるという。著者が目にした光景や体験したことと関連づけながら、専門家へのインタビューや様々な資料から得られた情報に基づき、中国の歴史や地理・経済・社会問題を論じている。例えば、北京の市街地には日本のように深夜まで光り輝くネオンがないことはもちろん、車のライトやレストランの明かりも最小限であることに触れ、広すぎる国土ゆえに一人当たり発電量が日本に比べて非常に少ない中国の電力事情について分析する。また音楽会鑑賞後に劇場の外で若者たちのデモを目撃した体験を語り、「下放青年」の就職問題について説明している。こうした問題点ばかりではなく、都市建設に関して論じる部分では、北京や鄭州などで街路樹が立派であることをあげている。

(久保茉莉子)

### 10億人の教育改革：現場の教師たちによる訪中レポート／未定征夫著

東京 第三文明社 1980 198頁 [10966]

本書は創価学会教育部訪中団が1979年8月24日から9月6日まで北京・上海・瀋陽・ハルビンを訪れた際の旅行記である。編者の未定征夫は創価学会教育部長を務めた人物で、同訪問は「国際教育交流の実施」の一環として企画された。このとき創価学会訪中団では、はじめて瀋陽・ハルビンを訪れたという。主に中国の学校教育の現状について団員たちが見聞きした情報がまとめられており、編者によれば「本書は友好・親善を主眼にした教育旅の「副産物」としてまとめられたレポート」だという。中国の幼稚園・小学校など様々な教育機関を訪れたが、最も多く訪問したのは大学で、滞在中には復旦大学・遼寧大学・吉林大学・ハルビン工業大学・北京大学の5つの大学を訪問した。

巻末には日中の小中学生に行った意識調査の結果が付されており、なかでも「将来の職業」についての質問では、日本では教師・医者・運動選手と答えた割合が多かったのに対し、中国

では医者・軍人・研究者（科学者）・技師などに人気集中していたことが示されており、当時の中国の状況をうかがうことができる興味深い資料となっている。

(山口早苗)

**西域をあるく：ウルムチ，トルファン，蘭州，西安／全国地理教育研究会第二次友好訪中団  
東京 古今書院 1980 156 頁 [10981]**

高校や中学の教員 14 人で構成された「全国地理教育研究会」による「西域」への旅行記。1979 年 8 月初旬に成田を出発し、香港－広州経由でウルムチ・トルファン・蘭州・西安をめぐる。日中旅行社と中国国際旅行社の手配によるオーダーメイドの旅行で、「シルクロードとともに歩んできたトルファン，炳靈寺，蘭州，西安などの文物が何を語りかけるのか等々，限りない憧れを抱いて」の旅であった。一行は，交河故城，高昌故城，アスターナ古墳群，炳靈寺，陝西省博物館，碑林，秦の兵馬俑坑，大雁塔など，現地の遺跡や博物館を訪問したほか，ウイグル族の家庭訪問や，カザフ族の包（パオ）や騎馬演技の見学など，少数民族の風俗にも親しんだ。トルファンの招待所では偶然，作家の井上靖にも行き会っている。西域ブームをまきおこしたとされる NHK「シルクロード」シリーズの放映（1980 年～）一年前の旅ではあるが，ブームにおいてステレオタイプとなるシルクロードへの憧憬や期待される観光地が，すでに確立しつつあるのが興味深い。

(辻直美)

**佃実夫の中国紀行アルバム／佃実夫著**

**東京 日外アソシエーツ 1980 181 頁 [10935]**

著者は文学者で、「日本文学者友好訪中団」（団長：尾崎秀樹，秘書長：滝沢直子，団員数：16 名）の一員として 1978 年 10 月に訪中した。この団体は，日本中国文化交流協会による日本の文学者の 12 回目の訪中団であり，全額自費による初めての訪中団であったという。上海で幼少期を過ごした作家の生島治郎や安西篤子も団員として参加していた。主な訪問先は，北京の故宮・万里の長城・明の十三陵・中国歴史博物館，西安の半坡遺跡・大雁塔・陝西省博物館・華清池・乾陵，重慶の中米合作所集中営米蔣介罪行展覧館，成都的都江堰・龍江路小学校・武侯祠，上海の魯迅故居・長寧区少年宮・上海図書館・復旦大学などである。また北京の対外友好協会事務所で中国人民対外友好協会副会長・全国文学芸術聯合会副会長の夏衍と面会するなど，現地の人々との交流も重視した旅となっている。本書は著者の急逝後，『思想の科学』1979 年 3・4 月号掲載の紀行文「わが中国紀行 歴史と文学への旅」2 編に加え，『徳島新聞』や『神奈川新聞』に掲載された連載，帰国後に行われた報告会の録音テープなど，様々な資料を採用して編集したものである。著者が残した資料は膨大で，23 巻の録音テープと約 2000 枚の写真の他，中国で購入した書籍，パンフレット類，煙草・酒・薬品・マッチ・弁当などの空箱，劇場のプログラム，会食の献立表，乗車券，ホテルの便箋や封筒までであったという。紀行の部分では，参観場所（観光地・史跡・博物館）についての比較的詳細な解説と現地での人々との交流や体験談が述べられている。また「佃実夫の中国昔話」と題するエッセイでは，著名な場所にまつわる歴史について紹介している。

(久保茉莉子)

**(特派員の目) 肌で感じた新中国／中野謙二著**

東京 毎日出版社 1980 238 頁 [10883]

著者の中野謙二はジャーナリストで、1976年3月から1979年4月までの3年2か月の間、毎日新聞社の海外特派員（北京支局長）を務めた人物。本書は著者が北京に特派員として滞在している期間に触れた、中国の政治・経済・社会の変化について体験記をまとめたもの。文革後期から四人組時代、華国鋒・鄧小平体制へと移る中で大きく変化した当時の中国社会を知るうえで役立つ書籍だろう。内容としては「激動の三年」「華・鄧体制の軌跡」のように中国政治を分析したものから、中国で生活する中で感じた違和感や、ウルムチ・トルファン・山東半島・廬山などを旅行した際の現地の様子、北京での生活風景などがざっくばらんに語られている。例えば、当時珍しかった自動ドアに中国の人々が驚く様子や政府の方針が緩和され犯罪が少しずつ報道されるようになったという記述から、当時の中国社会の変化をうかがえる。

(山口早苗)

中国の河川：黄河・長江・珠江をめぐって・訪中レポート No. 1／日本河川開発調査会  
東京 日本河川開発調査会 1980 177 頁 [11035]

日本河川開発調査会訪中団は河川開発を行う土木技術者、研究者を中心とし、医学者やカメラマンを含んだ28名から構成された。大学関係者5名、建設省、都県の官庁技術者11名、民間研究機関及びコンサルタント7名の官民合体の編成で、1979年6月21日から7月4日までの13日間、中国各地（北京・開封・鄭州・武漢・広州・香港）を巡った。この旅行は、中国旅行総社と近畿日本ツーリストの斡旋によって実現したという。

興味深いのは、通常の訪中団とは異なり、名所旧跡の見学を最小限にし、代わりに水利施設を中心に訪問の日程が組まれたことである。例えば、北京市郊外の十三陵ダムや開封市の黄河堤防、黄河展覽館、鄭州市の邙山揚水ステーション、漢口の長江大堤、水利施設を伴う花東人民公社などがそれである。また、土木の専門家が、中国国内の水利施設を見学するという目的のためか、本書にはほかの旅行記で見られるような訪中の感想はほとんど収録されておらず、訪問団の各メンバーが、滞在中に見学した施設や調査した内容を論文形式で寄せている。この点も本書がほかの旅行記と異なる特徴である。

(山口早苗)

主婦の目でみた素顔の中国：創価学会婦人部第1次訪中団記録／八矢弓子編  
東京 聖教新聞社 1980 298 頁 [10939]

創価学会婦人部第一次訪中団55名は1979年10月22日から31日まで上海・西安・北京を訪問した。中国側では鄧穎超が名誉主席を務める中華全国婦女聯合会が応接に当たった。創価学会では1974年に池田大作が団長を務めた訪中団が初めて訪中したが、この婦人部の訪問は創価学会では4度目の訪中に当たる。婦人団の訪問では工場や人民公社などのメジャーな見学先のほか、保育所や児童医院など出産・教育に関わる施設に足を運んだ。なかでも産婦人科で医師を務める参加者は北京婦産院を参観した折に、婦人科の処置室や分娩室を見学し、計画出産について質問したほか、実際に針麻酔による帝王切開手術を見学し、中国医学の現状を綴っている。また、巻末には創価学会婦人部第一次訪中団一覧、中国側の交流会出席者一覧なども付されており、当時の訪中団体の全容を知るうえで一定の資料的価値がある。

(山口早苗)



### わたしたちと中国のあいだがら／訪中記録の会

出版地不明 訪中記録の会 1980 138頁 [11034]

本書は第三次「中国三刊日本読者友好の翼」と名付けられた訪中活動の記録である（1978年8月4日から16日までの15日間）。三刊とは日本語雑誌『北京週報』『人民中国』『中国画報』の三誌のことで、雑誌読者から参加希望者を募集した。本書に寄稿したのは、訪中団に参加したメンバーの中でも北海道、東北、北陸在住の16名で、それぞれ中国体験記を寄せたほか、対応に当たった中国側の関係者や中学生からの手紙などを収録している。参加者の職業は多様だが、中高の教員や大学教員が半数以上を占める。参加者は初めて訪中した者のほか、戦前中国に滞在した者、戦後に複数回中国に渡った者などさまざまであった。

同訪中団は、北京では天安門や歴史博物館、長春では吉林大学、第一自動車工場、平頂山惨案遺跡記念館、五三人民公社、中医学院などを巡った。

(山口早苗)

### 人民の沈黙：わたしの中国記／松井やより著

東京 すずさわ書店 1980 382頁 [10961]

著者は当時朝日新聞社東京本社で編集委員を務めた人物で、外交官である夫の北京日本大使館への赴任につきそう形で中国に渡った。1975年8月から翌年1976年8月まで約1年間滞在中、その後も半年ごとに前後6回にわたり、1978年まで断続的に訪中した。本書は旅行記というよりも、正確には中国滞在記と考えてよいだろう。同時期は四人組失脚から華国鋒や鄧小平が政権を握る時期に当たり、中国社会が大きく変化した時期でもある。こうした中国社会の変化を伝えているという点で意義深い書籍だと言える。

北京滞在中に北京語言学院への入学を許された著者は「開門弁学（学校の外に出かけ、労働を行う教育活動）」に参加し、北京第二工作機械工場に2週間ほど実地研修に出かけている。また別の機会に人民公社へも実地研修に向い、実際に四季青人民公社を始め、北京郊外の黄土崗・南苑・中阿の三人民公社、瀋陽の五三人民公社、大寨生産大隊、延安の南泥湾国営農場などを訪問した。著者は末尾で、日本人の中国旅行者には中国の現実が見えていない、として次のように痛烈に批判している。「中国当局からの招待で入れ替わり立ち替わり北京にやってくる中国専門家や日中友好運動家たち」が「「老百姓」が日々の生活にどれほど悪戦苦闘しているかが見えないのである。だから筆をとればいいことづくめを書きつらね、「中国を正しく理解せよ」と説くのである」。当時の日中間の交流を知るうえで貴重な声であろう。

(山口早苗)

### 中国描きある記／森哲郎著

東京 盈進学園総合教育研究所出版局 1980 140頁 [10945]

著者は漫画家で、大東文化大学教授の香坂順一を中心とする「中国研究会訪中団」（団員数：22名）の一員として中国を訪れた。この旅行は1979年10月26日から15日間、広州・南寧・昆明・北京をめぐるというものであり、著者は各地で目にした壮麗な景色や人々の日常生活について、イラスト付きで解説している。主な訪問先は、広州仏山市の陶磁器工場、中山大學、南寧の絹紡織工場や百貨店、広西民族学院、昆明の石林・人民公社（双鳳生産大隊）、北京の友誼賓館・北京飯店・北京大學・天安門広場・頤和園・万里の長城・明の十三陵などである。著者は見学先の工場や大学について解説する際、それに関連して中国の賃金制度や進学状況な

どについても言及している。一方、北京中心街の交通混雑、女性たちの食事風景、公園でジョギングする人々、トランプゲームを楽しむ老人たちとそれを注意する警官など、日常生活の一幕一幕も実に面白く描かれている。また「人民公社の子供たち」「中国の少年たち」「廣州のおまわりさん」「列車服務員」「女の兵隊さん」などのイラストからは、中国で生きる様々な人々に対する著者の温かい眼差しがうかがえる。なおこの旅行には中日映画社のニュース映画班も同行し、著者たちの帰国後、11月には中日ニュース「劇画で日中友好」が上映された。

(久保茉莉子)

### 中国中国中国／劉多鶴子著

東京 形象出版 1980 156頁 [10995]

詩集。著者が中国で目にした光景や出会った人々と交わした言葉、中国や日本に対して抱いた率直な感情を綴っている。著者は中国で日本語学習のための教材が不足しているということを知り、「生きた感情のままの生きた言葉として日本語を掴んでいただきたい」（152頁）という思いでこの詩集を作成した。例えば上海の黄浦江については「茶色の濁流は／夏の熱さに／プンと粘土の／匂いを漂わす／舷すれすれに行き交う船／ジャンク／客船／貨物船／砂利船／ごみ船／遊覧船／商船／タンカー／材木筏／白波を蹴たててフルスピードで上って来る」（65～66頁）と表現している。また、「色々なものを見て来たので／優しい大きさをもつ老婦人／その中には戦争や革命をくぐり抜けて／晴々しい顔もあり／犠牲の感情の色もあった」（29頁）、「中国の共産主義は／人民大衆のために／自分の力を尽くすことだ」（63頁）など、著者の視点から中国社会について興味深い分析もなされている。帰国後に思いついたという詩では、「私は固く目をつぶる／私は遠くを見ている／遠く／遠く去って来た中国をみている／どの街にも通りにも／其処には／人間の顔をした人々がいたからだ／ああ／中国／中国／中国／中国／東京に帰って来て／街を歩けば／私の胸はかなしくうづく／なんという淋しい街だろうと」（23～24頁）と、帰国便で筆者が感じた中国に対する強い愛情が表されている。そのほか、旅行団についての「団長／副団長は／特権階級／遅れた時は／時間の方が従った／私は下っ端／遅刻すると／それでみんなにこづかれた」（55頁）といった描写も面白い。著者は文化学院美術部卒業という経歴を持ち、杭州の西湖、上海の街並みや黄浦江、蘇州の虎丘の斜塔などのイラストも自ら描いている。

(久保茉莉子)

### 胸にささる中国：わが<熱烈歓迎>の旅／若槻泰雄著

東京 サイマル出版会 1980 268頁 [10940]

著者の若槻泰雄は1924年山東省青島市で生まれ、1952年に東京大学法学部を卒業後、農林中央金庫、日本海外協会連合会サンフランシスコ支部長を経て、玉川大学教授などを務めた人物で、『戦後引揚げの記録』（時事通信社、1991年）などの著作がある。本訪問が38年ぶりの中国訪問であった。青島中学校の同窓会を中心として組まれた総勢22名の第1回友好訪中団は、1979年9月28日から10月13日まで上海・済南・青島・北京を訪れた。

著者は中国滞在で得た印象を次のようにまとめている。「第一は、日本が中国で犯した悪行の再確認であり、第二は中国人の涙ぐましいばかりの努力への同情と共感」、「第三点は、中国共産党政府の大きな成果の評価」と「これに対する仮借のない批判であり、そして最後は、日中両国関係への甘い期待の否定である」。本書でたびたび批判的に語られるのが、中国国内

での行動の不自由さである。中国各地を訪れても自由行動を制限しようとするガイドに不満をぶつけ、それを改善するよう求めている。故郷である青島を訪れた際には、思い出の地をもつと巡ってみたいと思うと同時に、「もう一刻も早く離れたい」と、相反する気持ちを抱く。著者はそれを「老いさらばえた昔の恋人、しかも人の妻になった恋人と会ったような気分」だと表現するが、思い出の地であった青島がすでに当時の青島とは異なっていることに幻滅、失望したようだ。ほかにも全体を通じて著者の感想が率直に記されている。

(山口早苗)